

星城大学

研究シーズ集

- 経営学部
- リハビリテーション学部
- 大学院・健康支援学研究科

2011年6月

改訂第3版

星城大学 地域センター

ごあいさつ

開学以来、多くの方々のご努力により地域交流センターが発展してまいりましたが、2011年度の組織改革の中で地域交流センターは、地域交流委員会、公開講座委員会と統合・改組され、地域センターへと生まれ変わりました。

地域センターでは、地域交流委員会にてまとめられた「星城大学地域協働戦略」や研究交流会、また、公開講座などの事業を引き継ぐとともに、星城大学の地域貢献を担うセンターとして、さらなる発展を目指していきます。

まず、地域センターは星城大学の地域貢献を推進します。地域貢献を通して、星城大学が大学市民（地域の一構成員）として地域に溶け込み、地域や学生、教職員から誇りに感じてもらえる大学になるよう活動を行います。

そのために、特に平成 23 年度は、学内連携を一層深めるとともに、地域との連携を提案し具現化できるよう、ゆっくりでも確実に活動を進めていきたいと思えます。

具体的には、地域センターでは5つの事業（広報事業、大学開放事業、地域参加促進事業、協働創出事業、学生支援事業）を中心として推進していきます。

2009年度に初めて発刊された本学の研究シーズ集も本年度で改訂第3版となりました。本年度も既に、いくつかの協働プロジェクトが始動しております。どうかこの冊子をご覧いただき、ご関心をお持ちになりましたら、ぜひ、お気軽にお問い合わせください。

私たちは地域の皆様と一緒に活動できることを願っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

2011年6月吉日

星城大学 地域センター
センター長 石田 隆城

ご連絡先

星城大学 地域センター

〒476-8588 愛知県東海市富貴ノ台 2-172

Tel : 052-601-6000

担当 藤井

目 次

●ごあいさつ	1
■経営学部	
赤岡美津子教授	: 教育カウンセリング、教育心理学、教育社会学、家族関係論等 5
秋山健太郎教授	: エネルギー・環境戦略、経営戦略論、経営組織論 6
雨宮康樹教授	: 労働経済学、欧州経済論、企業経営演習 7
岩田均教授	: 文化経済学、地域産業論、事業型市民セクター論 8
北野達也教授	: 地域医療、医療安全、医療の質、医療経営・管理、医療教育等 9
小林泰男教授	: 英文学、英国文化、時事英語 10
崔俊教授	: 戦略経営、危機管理、技術経営 11
法雲俊呂教授	: 経営工学、情報工学、経営情報 12
松原隆治教授	: 考古学、博物館学、遺跡・史跡の保存と活用 13
南川忠嗣教授	: まちづくり論、地域活性化、農商工連携支援 14
宮川清教授	: 広告論、広告表現論、マーケティング論、消費者行動論 15
横山正博教授	: 人的資源管理論、リーダーシップ論、人材育成論 16
盧聰明教授	: 経営学、組織論、企業文化論 17
天野圭二准教授	: 環境情報論、環境経営論 18
加藤知子准教授	: 言語、キリスト教、英語 19
神野真寿美准教授	: 英語教育、福音主義キリスト教、異文化理解 20
鈴木愛一郎准教授	: コーポレートファイナンス、M&A、内部監査 21
マーティン・スナイダー准教授	: 英語、ビジネス英語、異文化理解 22
野村淳一准教授	: 社会システム工学、経営工学、教育工学 23
平岩恵里子准教授	: 国際経済、国際労働力移動、開発経済 24
前田ひとみ准教授	: 言語学、日本語学、日本語教育 25
村上美保子准教授	: 英語教育学、言語習慣論、応用言語学 26
山田正人准教授	: マルチメディア論、都市計画学、都市・生活情報論 27
横井康博准教授	: スポーツマネジメント、スポーツ社会学、スポーツビジネス 28
綾野眞理講師	: 臨床心理学、健康支援学、異文化適応 29
日下部直美講師	: 現代中国語文法、中国語教育、言語学 30
■リハビリテーション学部	
大川裕行教授	: 理学療法学、健康支援学 32
久保金弥教授	: 神経科学、神経解剖学、歯科医学 33
竹田徳則教授	: 高齢者健康支援学、老年期作業療法学、社会疫学、認知症予防 34
武田洋平教授	: 辺境文化、比較文化、芸術一般 35
中島英司教授	: 哲学、倫理学 36
スコット・ピーターセン教授	: 応用言語学、教材開発、翻訳論 37

山田和政教授	: 理学療法学、健康支援学	38
ジョージ・サワ准教授	: 英語	39
田辺三千広准教授	: 西洋史	40
藤田高史准教授	: 日常生活活動学、健康支援学、高次脳機能障害治療学	41
古川公宣准教授	: 運動学、電気生理学、心身健康科学	42
森川孝典准教授	: 文化人類学、歴史学	43
飯塚照史講師	: 整形外科リハビリテーション、装具療法学、作業療法学	44
大浦智子講師	: 公衆衛生学、健康情報学、地域作業療法学	45
富山直輝講師	: 作業療法学	46
阿部友和助教	: ロボット工学、リハビリテーション工学、リハビリテーション医学	47
越智亮助教	: リハビリテーション学、健康科学、応用運動生理学	48
梶原史恵助教	: 健康支援学	49
木村大介助教	: 老年期作業療法学、地域作業療法学	50
芝寿実子助教	: 内部障害	51
林浩之助教	: 作業療法学、上肢装具学、上肢バイオメカニクス	52
松岡文三助教	: 保健医療福祉学、理学療法学	53
■大学院・健康支援学研究科		
植松光俊教授	: リハビリテーション科学・福祉工学、運動学、応用健康科学等	55
三田勝己教授	: 生体情報工学、神経筋生理学、健康・福祉工学	56

注1) 教員の配列は学部・職ごとの50音順。

注2) 教員からの任意の提出による（全教員の研究シーズを掲載したものではありません）。

経営学部

I 専門分野

教育カウンセリング、教育心理学、教育社会学、家族関係論、キャリア開発論

II プロフィール

京都市出身、立命館大学文学部卒業、京都大学大学院教育研究科研修員修了、京都市教育委員会教育相談総合センター指導主事カウンセラー、2007年から星城大学経営学部教授、心理検査士、上級教育カウンセラー

■担当科目：教育心理学、教育相談、生徒指導論

■所属学会：日本教育カウンセリング学会（理事）、日本教育心理学会、日本労務学会、京都市学校教育相談研究会（顧問）、立命館大学日本文学会

■社会的活動

家庭裁判所調停委員、日本教育カウンセリング協会スパーバイザー、京都市子育て支援センタースパーバイザー、京都市教育相談総合センター専門主事カウンセラー、京都市学校教育相談研究会顧問

III 主要著書・論文

- ・『“育てるカウンセリング”による教室対応全書』2003年、図書文化社、共著
- ・「告発から解放へ・生育歴に悩む母親の子育て相談」2003年、京都市永松記念教育センター『研究紀要』第1号所収、単著
- ・「“よい子”の不登校を巡って」2004年、京都市教育相談総合センター『研究紀要』第1号所収、単著
- ・「進路選択と決定に寄り添って」2005年、同『研究紀要』第2号所収、単著
- ・「心に響く“キャリアカウンセリング”のための一試行」2006年、同『研究紀要』第3号所収、単著
- ・「父が気付けば：学校・家庭・専門機関の連携」2007年、同『研究紀要』第4号所収、単著
- ・「女子中学生に見る、職業意識の形成」2008年、同『研究紀要』第5号所収、単著
- ・「孤独な子ども・親・家族」2008年、家庭裁判所会報6月号所収、単著

IV 研究紹介

①愛着関係の有無と思春期クライシス

各発達段階に於ける愛着関係のありようが如何に人格形成に関わるのか、とりわけ思春期通過との関連性を、面接による聞き取りを通して調査している。

②教育に於けるカウンセリングの役割

カウンセリングの思想と手法を用いた学級経営・生徒指導・授業運営への対応により、「教師」による学校カウンセリングの在り方を調査研究している。

③子育て中の保護者支援のあり方

V 地域の皆さんへのメッセージ

「温かく」「見守れば」、子ども達は必ず自ら動き出します。大切なことは、大人達がそのことをどれだけ信じ「待てる」か、でしょう。学習会の講師など、お手伝いの出来ることがあれば仰って下さい。

I 専門分野

労働経済学 欧州経済論 企業経営演習

II 研究テーマ

1. 中小企業経営者研修
2. 欧州経済・企業論

III 研究紹介

1. 経済のグローバル化が急速に進展する今日、世界的な規模で企業間競争が進行している。世界的な規模で勝ち組企業が生まれる一方で、市場競争に敗れ淘汰される企業も生まれている。このような厳しい競争環境を勝ち抜くためには、従業員一人一人に経営者としての能力が求められている。経営者として必要な能力を短期間にかつシステムティックに養成するため、経営大学院等で使われる経営シミュレーションソフトを用いた企業研修を実施している。
2. 欧州進出企業従業員に対する語学講習を含む研修会の実施
3. ドイツ、フランス企業の多国籍展開に関する研究

【参考】

■プロフィール：愛知県出身、大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程修了 博士（国際公共政策、Kawai Deutschland GmbH Prokurist, Kawai Nederland Managing Director, Kawai UK Managing Director を経て、2001年4月より星城大学経営学部教授 愛知大学経営学部講師（ユーロビジネス論担当）

■担当科目：マネジリアルエコノミクス（経営経済学）、国際労働、マネジリアルエコノミクス、直接投資論

■社会的活動：日仏経営学会会員、国際経済学会会員、翠松園陶芸記念館理事

■主な著書・論文など

「フランス労働市場における賃金構造の変化と内部労働市場」「フランスホワイトカラーの賃金構造の変化」「フランス大企業におけるホワイトカラーの昇進」「年齢・賃金プロファイルの再検討」「フランス大企業における部長への昇進」「The Promotion of White-Collar Workers in Large French Firms」「昇進メカニズムの再検討」「日系製造業の対仏直接投資と撤退」「拡大 EU に伴う労働力移動と価格形成」「労働力移動の自由化と頭脳流出」「中国の EU 外交とアフリカ」「中小企業の海外進出と人材育成」「欧州中小企業のグローバル戦略」「経済危機と欧州議会選挙」「フランス企業経営者のリーダーシップ」「Les déterminants des investissements directs et des disinvestissements des entreprises japonaises en Europe au cours des vingt dernières années」

I 専門分野

エネルギー・環境戦略、経営戦略論、経営組織論

II 研究テーマ・研究紹介

1. スマートコミュニティ実現に向けて

日本の産業は、現在、①エネルギーの安定的な確保、②低炭素社会への移行、③産業の再生、という3つの大きな課題に直面している。これらを同時に解決するものとして、スマートグリッド、さらにはスマートコミュニティが注目されている。わが国は技術力を中心とした総合力を生かして、スマートコミュニティ実現に向けて、国益、グローバル益の観点から戦略的に対応していく必要がある。①国際標準化、②社会インフラ、③社会システムとしてのスマートコミュニティ、④国の支援の在り方等多岐にわたって総合的に検討していくことが重要となっている。現在、世界各地で実証試験が進んでいる段階にある。本研究では、日本のスマートコミュニティ実現に向けた、戦略について明らかにする。

2. 日本のエネルギー・環境・産業戦略

エネルギー企業は、今後、自らがリスクをとって、エネルギー・セキュリティの問題、地球環境問題に対処していく必要がある。そのためには、現在の電力業界、ガス業界、石油業界の枠組みを超えた、世界に通用する、新しい時代に適応したエネルギー企業の再編について検討していく必要がある。

【参考】

■プロフィール

三重県津市出身、早稲田大学理工学部卒業、名古屋大学大学院経済学研究科博士課程修了（経済学博士）、(財)国際超電導産業技術センター調査企画部主任研究員、中部電力株式会社 技術開発本部研究企画グループ副調査役、四日市・緑電力センター所長、知的財産グループ長等歴任、2009年から星城大学経営学部教授、2010年から独立行政法人・新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）技術委員。

■担当科目：経営学原理、コーポレート・ガバナンス、経営組織論

■社会的活動：日本経済政策学会、日本経営学会、組織学会、公益事業学会、日本エネルギー学会、電気学会、国際戦略経営研究学会等、日本エネルギー研究所学会員、NEDO スマートコミュニティ・アライアンスメンバー、北東アジア天然ガス開発利用研究会メンバー

■主な著書・論文など

- ・「規制緩和下における電力会社の戦略」2005年『日本経営学会誌』第14号、単著
- ・「電力会社の多角化戦略」2006年『日本経営学会誌』第18号、単著
- ・「電力会社の通信事業戦略」2008年『経済科学』55巻、単著
- ・「持続的な競争優位の確保に向けた都市ガス会社の戦略－規制緩和への対応から国際展開へ」2008年、『公益事業研究』60巻第1号、単著
- ・「総合エネルギー企業を目指した電力会社の戦略－グローバル戦略構築に向けて－」2009年『公益事業研究』60巻第4号、単著
- ・「エネルギー企業の経営」2010年『公益事業研究』61巻第4号、単著

I 専門分野

文化経済学、地域産業論、事業型市民セクター論

II 研究テーマ

1. 地域固有の文化的資源を生かした産業おこしとまちづくり
2. 脱工業社会の担い手育成

III 研究紹介

1. 伝統産業・農業・商業・観光の振興、市町の総合計画や業界のビジョン策定、地域の国際化・情報化や学術研究都市の整備などに、行政・シンクタンク・大学教員の立場から携わってきました。現在は、グローバルな問題を解決するためにも、日常の暮らしや地域産業の現場からの問題解決が重要との立場から、地域固有の文化的資源を生かしたまちづくりに力を注いでいます。
2. 近代以降の大工業文明の限界を克服する担い手として、コミュニティビジネス、ソーシャルビジネス、社会起業家などと呼ばれる事業型市民セクターの登場に注目しています。

◎ 市民・企業・行政・経済団体・大学などの有志が一堂に会し、本音の議論ができる場として「東海まちづくり研究会」を月一回のペースで開催しています。ご関心をお持ちいただいた方のご参加を歓迎しますので、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

■プロフィール:神戸市生まれ、京都大学経済学部卒業、京都府庁(中小企業総合指導所、農林部農政課、企画調整室、東京経済情報センター所長、文化芸術室参事、商工部観光・商業課長)、(株)シンクタンク宮崎(理事)、(株)地域社会研究所(取締役)、京都大学大学院経済学研究科修了(経済学修士)、2002年から星城大学経営学部教授

■担当科目:文化経済論、地域産業論、観光事業論、事業貢献論、ゼミナールなど(立命館大学でコミュニティビジネス論)

■社会的活動:文化経済学会、日本労務学会、組織学会、経営学会、NPO学会などに所属。東海まちづくり研究会主宰、東海市行政改革推進委員長、同産業振興ビジョン策定委員長など。

■主な著書・論文

- ・「文化への公的支援」池上惇他編『文化経済学を学ぶ人のために』1993,世界思想社,所収
- ・「中小企業の金融問題」藤田敬三他編『中小企業論(第4版)』1998,有斐閣,所収
- ・『産地再生戦略～伝統的産業集積の創造的革新～』1998,地域社会研究所
- ・『京都発・商店街の将来展望』2001,京都商店街振興組合連合会
- ・『新時代の都市経営』2001,大学コンソーシアム京都(共編著)
- ・「地域産業の興亡」赤岡功他編著『経営戦略と組織間提携の構図』2005,中央経済社,所収
- ・「新時代の産官学連携」球相材料研究会編『球相炭化物材料』2006,日刊工業新聞社,所収
- ・「職人仕事の本質－仕事による人間の成長－」『立命館経営学』(48巻4号)2009,所収
- ・「地域力を育む大学の役割－実践を通じての考察－」『星城大学研究紀要』(第9号)2010,所収
- ・「職人仕事は現代産業の限界を突破するカギ」『日本政策金融公庫調査月報』(No.023)2010,所収
- ・その他、書評(大阪経済大学中小企業経営研究所『中小企業季報』)、論説(京都新聞「経済天気図」)、受託研究報告書(行政・経済団体)など

I 専門分野

地域医療、医療安全、医療の質、医療経営・管理、医療教育 等

II 研究テーマ

1. 自治体病院支援のためのERM導入とSRI(社会貢献投資)システムの開発
2. 地域におけるメタボリックシンドローム対策調査・啓発に関する研究
3. 医療安全管理のためのハイリスク・パス分析モデル開発と検証

III 研究紹介

1. 自治体病院の91.4%(2008年)が赤字運営です。地域医療を担う自治体病院を継続運営するためには、内部統制は勿論、医療の質・安全管理について客観的評価を下すことのできる第三者評価機関設置、さらには、社会貢献投資(SRI)型自治体病院運営体制を提案したいと考えております。地域医療改革を具現化するためには、地域住民の方々の住民力(住民の自治能力)なくして成立しません。地域の皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思っております。
2. 医療の質・安全管理体制を客観的に評価するための医療の質・安全管理モニタリング分析ツールを開発し、各医療機関に対し分析評価のフィードバックを実施しています。自治体病院支援、地域健康増進普及活動など、地域医療支援に関するご相談などに積極的に対応します。

【参考】

■プロフィール:福岡県北九州市生まれ、小・中・高校時代を東海市で過ごす。九州大学大学院医学系学府医療経営・管理学専攻修士課程修了(医療経営・管理学修士)。九州大学大学院医学系学府環境社会医学専攻医療システム学講座 医学博士課程。各病院において医療安全管理部長(Patients Safety Manage)として医療事故調査、院内安全管理体制再構築。)、財団法人日本医療機能評価機構、医療事故防止センター初代医療事故防止事業課長、病院長補佐(特命任務:院内質改善、経営改善等病院再建)歴任。現在、兼職にて宏潤会大同病院医療安全管理顧問、自治体病院再建、医療機関5施設において医療経営・管理顧問、オブザーバー、富山大学医学部非常勤講師、富山大学大学院医学薬学研究科非常勤講師、九州保健福祉大学保健科学部非常勤講師、藤田保健衛生大学医学部客員講師など務める。

■担当科目:病院管理論、医療安全管理学、地域医療学、医療環境教育学、患者安全管理学、医療システム論、医療政策学、医療経営学、医療コーディネート論、医療管理学、社会保障論、クオリティマネジメント論 ほか。

■所属学会:医療の安全に関する研究会(常任理事)、日本医療経営学会、日本医療・病院管理学会、医療の質・安全学会、日本航空医療学会、日本医学教育学会、日本医工学治療学会(評議員)、日本医療機器学会(評議員)、神戸医療経営学研究会研究員、モデル&シミュレーション医学教育研究会、財団法人国家基本問題研究所 ほか。

■社会的活動:医療の安全に関する研究会 常任理事、日本医工学治療学会 評議員、NGO国際医療協力プロジェクト副理事長、宏潤会大同病院 医療安全管理顧問、地域医療支援プロジェクト代表

■主な著書・論文など

- ・東京都主催医療安全管理体制支援事業「医療安全管理者養成講座テキスト」,北野 達也, P20-P53,2008.12.4
- ・「医療におけるコミュニケーションと医療安全～患者安全管理の手法～」北野 達也,安全医学,Journal of Medical Safety,Vol.4(2):P17-P21,2007.11.30

小林 康男 (こばやし やすお) 経営学部 教授

I 専門分野

英文学、英国文化、時事英語

II 研究テーマ

1. シェイクスピアの戯曲
2. 英国文化

III 研究紹介

1. シェイクスピア悲劇の言語・技巧的研究
2. 英国紅茶王リプトン研究

【参考】

■プロフィール：埼玉県八潮市生まれ、愛知大学文学部卒業、愛知教育大学大学院修士課程修了、
2003年から星城大学経営学部教授

■担当科目：英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、文学、時事英語、文化教養ゼミⅠ・Ⅱ、キャリアサポートⅠ・
Ⅱ、社会探索ゼミ

■社会的活動：日本シェイクスピア協会会員 リネッサンス研究所会員 片平会会員
愛知教育大学英語英文学会会員

■主な著書・論文など

- ・『田中幸穂先生退官記念論集』1988年、桐原書店、共著
- ・『ことばの地平』1995年、英宝社、共著
- ・『英語・英文学の風』1996年 金星堂、共著
- ・『ことばのシンフォニー』1999年 英宝社、共著
- ・「英国紅茶王・リプトン小伝」2003年、名古屋明德短期大学紀要第18号、単著
- ・「シェイクスピア研究の手法」－日本シェイクスピア協会の研究発表より－、2007年、
星城大学人文論叢 第3号、単著
- ・「ロミオとジュリエット」映画化された3作品の比較（研究ノート）2010年 星城大学人文研
究論叢 第6号 単著

I 専門分野

戦略経営、危機管理、技術経営

II 研究テーマ

1. 持続性を高める戦略的危機管理の枠組みのその実践原理
2. 大学経営における戦略経営と危機管理

III 研究紹介

1. 現代企業経営においてはただ一回の戦略的選択の失敗がただちに企業の存続をも左右する致命的な危機に繋がる。特に最近の何年間、食品偽装の問題を始めとする不祥事が多発しているし、未曾有の経済危機が発生し、経営環境の不確実性はさらに増している。このような経営環境の中では、大きな成功を目指した経営戦略大事であるが、それに加えて予期せぬ事態に対応できる自己防衛能力を強化するのが、持続可能な経営を実現するにあたって何よりも大事な経営課題になる。このような認識に基づき、戦略的選択に伴う危機誘発の可能性、より善良な企業市民としての CSR の観点、国際的な関係を含む組織間関係の形成、予期せぬ事故・事件の発生やコミュニケーション関係を含む人間的要素から生じうる管理的欠陥の観点、核心技術の開発と確保に伴う危機誘発の可能性といった組織の本質的な経営要素から、戦略経営をベースにした、組織の持続性を高める経営の枠組みと実践原理としての戦略的危機管理の実践原理に注目する。
2. 今大学経営は大きな転換点を迎えている。少子化に伴う現実的な経営環境の悪化はもちろんのこと、大学進学者の基礎学習能力の低下に伴って大学教育の本質的な在り方に対する混乱が生じている。それにより、大学経営においては目先の経営状況を何とか乗り越えるための苦肉策が乱発される中で、明確な戦略的な方向性を見失ったまま右往左往していると言える。組織の経営戦略、危機管理の観点から今後の大学経営のあるべき姿を探る。

【参考】

- プロフィール：韓国ソウル出身、京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了、経済学博士(経営学専攻)、韓国ポスコ経営研究所経営戦略部門リーダー(研究委員)、DBM Korea 主席コンサルタント、韓国漢陽大学/産業大学院、情報通信大学院非常勤講師を経て、2004 年から星城大学経営学部教授
- 担当科目：経営戦略論、危機管理論、技術経営論
- 社会的活動：組織学会、経営学会、日本リスクマネジメント学会、日本労務学会、賃金学会、愛知人事問題研究会、在日韓国人研究者フォーラムに所属。
- 主な著書・論文
 - ・危機管理論序説、1995.4、「調査と研究」、第 8 号、京都大学
 - ・組織環境の特性とその意味付けの連鎖、1996.2、「経済論叢」、第 157 巻 第 2 号、京都大学
 - ・大学危機の本質と対応-韓国大学の現状とその対応から学ぶ-、2007.9、星城大学「研究紀要」第 4 号、星城大学
 - ・企業危機管理の実践原理(韓国語版)、2001 年 4 月、芸元出版社(韓国)
 - ・「経営戦略と組織間関係の構図」(共著)、第 13 章: 戦略的危機管理、2005 年 3 月、中央経済社
 - ・「日本企業の創造性」(共著)、創造的組織創り・創造的組織革新の条件-、2008 年 12 月、三恵社

I 専門分野

経営工学、情報工学、経営情報

II 研究テーマ

1. 地産品の出荷管理と追跡情報に関する研究
2. 過疎化農村地域のまちづくりと地域資源(空き家)等の利活用

III 研究紹介

1. 地域主権の時代が叫ばれ、地域固有の産業育成が急を要しています。地域資源の活用や地域ブランド振興などの施策が展開されていますが、現実には国内製造業の空洞化はあっというまに進んでいます。また、TPP 問題も農業には大きな課題を投げかけています。このような状況の中で、地域の特産品を出荷して消費者の購買に結びつけるには、付加価値のつく販売ルートの開拓が不可欠だと思います。

今、新しいトレーサビリティのあるツールとして RFID という電子タグが注目を集めています。工業製品や農業製品にこの電子タグを添付して、出荷管理、品質管理や搬送ルートの管理を行なうことにより、出荷の省力化・品質の維持・搬送中の情報収集等、付加価値の高い産品出荷が可能になります。

私は、このような分野で国内のみならず、中国の大学や企業とのシステム開発に取り組んで研究を進めてきましたが、企業や農家の方で関心のある方はご相談に積極的に対応します。

2. 少子高齢化が進み、日本の人口は都会に集中する傾向にある中、地方の農山漁村は人口がどんどんと減少しています。このまま行けば、将来は村がどうなるのだろうかと不安に思っている人も少なくないと思います。

実は私の地域もそのような傾向にあり、地域の皆さんとともに「過疎化農村地域のまちづくりと地域資源(空き家)等の利活用」をテーマに研究活動を行っています。具体的には、数町が集まった懇話会を立ち上げ、都会と田舎を結ぶ交流イベントの開催、農家民泊の実施などさまざまな事業を実施しています。参加していただいた地域の方々・都会の来訪者に楽しかったと思っただけのような展開を心がけ、好評をいただいています。今後も、これらの取り組みにより地域の皆様が生き生きとした生活を送ることのできる地域づくりを継続してゆきたいと考えています。

知多の地域でもこのような活性化の事業が展開できればと、思っています。私の研究や活動に関心をお持ちの方は、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

- プロフィール：滋賀県米原市生まれ、ノースウェスタン大学客員研究員、滋賀大学、龍谷大学の教授を経て、2003年から星城大学経営学部教授。中国湖南工学院大学名誉教授。
- 担当科目：情報ネットワーク論、ビジネスモデルコンピューティング論、情報教科教育、情報倫理、ゼミ 2～4年
- 社会的活動：米原市まちづくり懇話会座長、いざない湖北定住センター理事長、米原市社会福祉協議会委員、同市人権保護委員会委員
- 主な著書・論文など
 - ・『現代工業経営学』1982年、有信堂、共著
 - ・『企業情報システム論』1987年、杉山書店、単著
 - ・『経営工学』1989年、オーム社、単著、他多数。論文 70数編。

I 専門分野

考古学、博物館学、遺跡・史跡の保存と活用

II 研究テーマ

1. 歴史を生かしたまちづくり

III 研究紹介

1. 私は観光まちづくりコースのゼミナールを担当しておりますが、実際にまちづくりの現場を経験したことはありません。考古学が専門ですので、遺跡や史跡の保存と活用についてはいろいろ事例を調べることはしてきたつもりです。まちづくりに関しては、このところ、重要伝統的建造物群保存地区指定地域を見学すること、まちづくり株式会社の活動を調べること、などを心がけています。

全国にはまちづくりにかかわっている大学がかなりあります。関西学院大学の片寄俊秀先生を代表世話人とする全国まちづくりカレッジが、第 11 回目の今年は香川県高松市にある香川大学及び直島で開催され、学生とともに参加しました。少しずつですが、全国各地でのまちづくり活動の実態の情報を集めています。星城大学の地元でまちづくり活動を行いたいと考えています。

【参考】

- プロフィール：愛知県春日井市在住、南山大学文学部卒業、南山大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学、1985 年から（財）愛知県埋蔵文化財センター調査研究員、1993 年から名古屋明德短期大学国際文化科専任講師、1997 年同助教授、2003 年から星城大学助教授、2008 年から同教授
- 担当科目：文化教養ゼミ、ゼミナール（観光まちづくり）、考古学、博物館学
- 社会的活動：東海市文化財調査委員、春日井市文化財保護審議委員、愛知県史調査協力員、国土館大学イラク古代文化研究所共同研究員
- 主な著書・論文など
 - ・「野外考古学にあけるデジタルカメラの活用について—オラーン・オーシグ I 遺跡の発掘調査より—」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』 pp.345-360、伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、2007 年
 - ・「知多半島のマンボ（1）『研究報告 とうかい』創刊号、pp.81-89、東海市教育委員会、2007 年
 - ・「知多半島のマンボ（2）『研究報告 とうかい』創刊号、pp.50-53、東海市教育委員会、2009 年

I 専門分野

まちづくり論、地域活性化、農商工連携支援

II 研究テーマ

1. 農商工連携等地域資源を活用した地域の活性化に関する研究
2. 中心市街地活性化とまちづくりに関する研究
3. 商工会のあり方に関する研究

III 研究紹介

1. 地域主権の時代が叫ばれ、地域資源の活用や地域ブランド振興などの施策が展開されていますが、現実には地域における産業の疲弊と衰退が急速に進行しています。地域には、農・漁・林業や製造業、商業等が存在しそれぞれの活性化に取り組んでいるものの、それらが地域として有機的に連携している例は少ない。中小企業者と農林漁業者が連携し、それぞれの経営資源を有効に活用して取組み地域活性化の可能性を探ることが重要だと考えている。

私は、全国中小企業中央会が各地で実施している「農商工連携等支援専門家の育成」研修会を修了し、「農商工連携等支援専門家」として登録し各取り組みの相談に応じている。

2. 郊外への商業集積が進み、都市の顔としての中心市街地の空洞化が進行し、まちの活力や賑わいが失われています。このままでは生活利便性の低下や、生活空間としての魅力の喪失、公共サービスの低下、都市を運営するコストの増大が引き起こされます。私は、まちの生活拠点を再生し、次世代あるいは増加する高齢者を含めた多くの人々にとって住みよい快適なまちづくりとは何かを問い続け、その取り組みのあり方を研究しています。全国のまちづくりの現状を調べに飛び回っていますのでそれぞれの地域に応じた活性化の取り組みの相談に応じることが出来ます。
3. 地域の中小企業者の経営改善に関する相談とその指導、地域内の経済振興を図る諸活動を展開に大いに貢献してきた商工会は、会員企業の経営の悪化、会員の減少、国・地方公共団体からの補助金の削減の中であってその存在意義を問われている。大阪府の商工会連合会の課題調査研究委員会での調査研究を踏まえて商工会のあり方、本来の活動を選択と集中によって会員の期待に沿う商工会として生き残っていく方策を研究し、その相談にも乗っている。

【参考】

- プロフィール：石川県能登地方生まれ、関西大学商学部卒業、大阪府立産業開発研究所主任研究員、沖縄大学教授、2002年から星城大学経営学部教授
- 担当科目：経営学概論、まちづくり論、流通基礎論、中小企業経営論
- 社会的活動：東海市中心市街地活性化基本計画策定委員長、東海市公の施設指定管理者選定委員会委員長、大阪府商工会問題調査研究委員会委員長など各種委員会委員を務めている。
- 主な著書・論文など
 - ・『販売戦略ノート』、『販売促進のアイディア・実例集』、『卸売マーケティング』、『現代企業総論』等の書籍、いずれも共著

I 専門分野

広告論、広告表現論、マーケティング論、消費者行動論

II プロフィール

神奈川県大磯町出身、(株)博報堂シニアプロデューサー、九州産業大学大学院芸術研究科博士後期課程修了、博士(芸術)、2007年から星城大学経営学部教授

■担当科目：広告論、マーケティング、マーケティング・リサーチ、消費者行動論

■所属学会：日本広告学会(論集編集委員・クリエイティブ委員)、日本デザイン学会、芸術工学会

■社会的活動

総理府・国政に関する広報委員会委員、JFMステレオCM広告賞審査員、フジサンケイ広告大賞審査員、仙台広告賞審査員長、藤枝市企業誘致審議会委員長、藤枝商工会議所未来塾講師、FM静岡(K-MIX)番組審議委員会委員、K-MIX・CMコピーコンテスト特別審査員など

III 主要著書・論文

- ・『マーケティング・コミュニケーション』2009年、清水公一編著、五紘舎、共著
- ・「IT時代における企業イメージの構築」2001年、日本広告学会『広告科学』第43集所収、単著
- ・「企業不祥事と企業表現」2002年、日経広告研究所『日経広告研究所報』第207号所収、単著
- ・「企業理念とブランド構築」2006年、日本広告学会『広告科学』第47集所収、単著

ほか

IV 研究紹介

①「お詫び広告」の調査研究

企業不祥事発生時における日米の「お詫び広告」を収集し、その表現手法等の分析を行っている。日本における「お詫び広告」の歴史も合わせて研究している。

②企業イメージとブランド構築についての研究

ブランド構築の構成要因の分析から、構築概念「CPとPP」を理論化し、提唱を行った。

V 地域の皆さんへのメッセージ

広告・広報・マーケティング関連にて専門家の意見をお聞きになりたい方、企業の危機管理・ブランド構築等に興味を持たれた方はお問い合わせください。

I 専門分野

人的資源管理論、リーダーシップ論、人材育成論

II 研究テーマ

1. 創造的組織とモチベーション
2. 環境変化とキャリア開発

III 研究紹介

1. グローバル化や情報化など社会環境の急速な変化に対応するため、企業や行政はいうに及ばず、地域団体、家庭や個人にいたるまで、創造性が常に求められています。

例えば阪神大震災では多数のボランティア組織が活動しましたが、個人の創造性が組織の創造性をもたらす自己組織化などに注目し、個人の創造性と創造的組織の関連を研究しています。

2. 組織の発展には創造性ととともに、構成員である従業員などの人材育成が不可欠です。組織には本来、人材育成の側面が備わっておりますが、近年、わが国の長期雇用慣行が変化し、人材育成能力の低下もみられるため、今後のキャリア開発の意義や方法を研究しています。

【参考】

■プロフィール：兵庫県明石市生まれ、京都大学大学院経済学研究科修了。

2003年から星城大学経営学部教授

■担当科目：人的資源管理論、人材開発論、モチベーション論、リーダーシップ論

■社会的活動：日本労務学会理事、日本経営学会会委員、人材育成学会会員

■主な著書・論文など

- ・『人的資源管理の基礎と展開』2005年、中央経済社、単著
- ・『日本企業の創造性』2008年、三恵社、共著
- ・『労務管理と人的資源管理の構図』2005年、中央経済社、共著
- ・「パートタイム労働の基幹労働力化の背景と方向」1997年、
『大原社会問題研究所雑誌』No469 単著
- ・「戦略的人的資源管理を生かす従業員の創造性について」2007年、
『星城大学研究紀要』第3号、単著
- ・「経営戦略における長期雇用の役割と従業員の創造性」2008年、『星城大学研究紀要』第5号、単著
- ・「創造的モチベーションの要因について」2009年、『星城大学研究紀要』第7号、単著
- ・「創造性における自己実現欲求と価値について」2010年、『星城大学研究紀要』第9号、単著
- ・「幅広いキャリアによる創造的地域づくり」2008年、(財)地方公務員ライフプラン協会、『キャリア開発ハンドブック』、単著
- ・「地方分権時代のキャリア開発」2009年、(財)地方公務員ライフプラン協会『キャリア開発ハンドブック』、単著
- ・「自治体職員のキャリアプランと管理職」2009年、『地方自治職員研修』第42巻595号、臨時増刊号No92、単著
- ・「都市自治体職員のキャリアデザインと行政執行の専門性確保」2010年、(財)日本都市センター『都市とガバナンス』、単著

I 専門分野

経営学、組織論、企業文化論

II プロフィール

1958年台湾・台北市生まれ。京都大学経済学部卒業、同大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。三和総合研究所（現「三菱UFJ Research & Consulting(株)」）金融戦略部研究員。同社の国際経営開発部、企業戦略室などにて勤務。2002年4月から星城大学経営学部教授。

■担当科目：グローバルマネジメント、ベンチャービジネス論、海外ビジネスセミナー、国際ビジネス実践セミナー、文化教養ゼミ、ゼミナール等

■所属学会：日本経営学会、組織学会、日本労務学会、日本台湾学会、日本中国経営管理学会

■社会的活動：留日名古屋華僑総会理事、セムイ学園東海医療専門学校顧問、道恒環保科技（北京）有限公司監査役、株式会社松本微生物研究所取締役、国際合作映画「案山子」アソシエイトプロデューサー（2001年）など

III 主要著書・論文

■著書：『労務管理と人的資源管理の構図』（共著、2005年、中央経済社）、『活路を拓く台湾産業』（共著、2002年、財団法人交流協会）、『アジア諸国におけるベンチャー企業の動向と課題』（共著、2001年、社団法人アジア社会問題研究所）、『1997年日本と世界経済の焦点』（編著、1997年、台湾聯経出版事業公司）、『中国東北地方の発展方向』（共著、1995年、日中東北経済開発協会）、『エレガントな時代の労働と生活』（共著、1993年、法律文化社）。

■論文・講演：「中台で見た産学連携の発展と課題」2009年11月於星城大学、「環境保全と教育事業は今後も中国の有望なビジネス分野であり続ける」2009年みずほ銀行『みずほ中国 法務・税務・労務ヘッドライン』No.3、「日本の大学国際化と国際教育の発展趨勢」2008年『東亞論壇季刊』No.462、「近年における日本企業の対中企業戦略の変化と動向」2005年・星城大学『研究紀要』No.2、「中国の私営企業とベンチャービジネス - 躍進する私営企業とその課題 -」2004年・全国日本学士会『アカデミア』No.86、「日本企業の対中企業戦略」2002年於京都大学など。

IV 研究紹介

- ①華人経済圏における日系企業の進出戦略と実務
- ②台湾の非典型的雇用に関する研究
- ③日・台・中の高度教育研究機関による複合的・有機的連携関係に関する調査研究

V 地域の皆さんへのメッセージ

当方の研究内容の詳細は次のJ-GLOBALのウェブサイトを参照して頂きたい。

http://jglobal.jst.go.jp/detail.php?JGLOBAL_ID=200901091433423295&t=1&d=1&q=6000000228 同内容に興味を持たれた方はお問い合わせ下さい。

また、華人経済圏における進出関連の実務経験も持っているため、共同研究のみならず、関連する実地調査などにも対応することができます。本学の国際ビジネスコース「国際ビジネス実践セミナー」にて、海外の第一線で活躍されている企業の経営者や管理者を招いて学生に実践的な講義を行って頂いているので、若者に国際経営の現実を語って頂ける方は是非ご一報下さい。

I 専門分野

環境情報論、環境経営論

II 研究テーマ

1. ヨーロッパにおける知識基盤経済転換に向けての産官学連携モデルに関する実態調査研究
2. 社会教育におけるデジタルゲーム（シリアスゲーム）の活用

III 研究紹介

1. 地方が産業振興を実現する経路はケースバイケースですが、一つの方法論に、その地方にある知的資源の活用があります。私が専門にしてきた北欧では、10万人程度の規模の都市で次々とベンチャー企業を生み出し、世界でも有数の産業集積を実現させている地域があります。このような産業集積はどのような取り組みによって可能になるのか？その中で知識や情報はどのように動いているのか、そのエッセンスを見出すことが研究課題です。
2. 市民としての生活では社会全体を捉えにくい現代において、シミュレーションをはじめとする情報技術の活用は社会経済活動が抱える様々な問題を可視化する上で有用なツールです。

天野研究室は、環境情報論・環境経営論の研究を行っており、その複雑で専門的な内容を理解したり、全体像を把握するための手段として市販のデジタルゲームを用いています。これは都市づくりにおいて市民が問題を把握するための手段を社会に提供することを意図するものです。

【参考】

- プロフィール：静岡県三島市生まれ、立命館大学大学院国際関係学研究科 博士課程修了
 - 担当科目：環境情報論，環境経営論，日本経済論
 - 社会的活動：東海市環境審議会，公害防止協議会，緑化審議会，緑陽公園基本構想検討委員会委員
 - 主な著書・論文など
- ・ Junko Tohda, Keiji AMANO, Shunei Norikumo(2007), *Knowledge Enabling - Verification of Knowledge Creation and Enabling in the Finland Model* “Creative Futures Conference” Pori FINLAND
 - ・ 天野圭二・燈田順子（2005）「「場」を動かすナレッジ・イネープリングーフィンランドの産業クラスターモデル」2006年度組織学会年次大会報告要旨集 pp.19-24
 - ・ 天野圭二（2006）「欧州共通運輸政策における自然環境情報の有効利用への課題」安齋育郎教授退職記念論集編集委員会編『平和を拓く』 pp.226-238
 - ・ 天野圭二・野村淳一（2010）「デジタルゲームを活用したシリアスによる 経営学教育実践の試行」日本情報経営学会第61回大会予稿集 pp.51-54

I 専門分野

言語、キリスト教、英語

II 研究テーマ

1. 英語素材に見られる宗教的背景の検討
2. 市民性育成という視点からの英語教育

III 研究紹介

1. 英語素材に見られる宗教的背景の検討

グローバルな人や物の移動と共に、異なる文化圏での宗教観・価値観に触れる機会も増えました。教育の場でもそれは例外ではなく、英語素材にもその素材作成者の宗教観・価値観が反映されています。例えば、大学教育学会第32回大会（2010年度）で口頭発表しました「教養教育という視点から見た『TOEIC®テスト新公式問題集』」では、TOEIC®テスト問題集に見られるアメリカ市民宗教の徳性について言及しました。同意するか否かに関わらず、自分とは異なる考え方に会った時に己はどうするのか、グローバル世界の中で日本の教育はどうあるべきなのか、地域の皆様とご一緒に考える機会があれば幸いです。

2. 市民性育成という視点からの英語教育

学校・大学は学びの共同体であり、そこでは各成員が責任を果たすことが求められます。しかしながら、実際の教育現場では、クラス内、学校・大学内での強い共同体意識が常に保たれるとは限りません。健全な意味での共同体意識は健全な心から生まれます。民主国家である日本においては、そのような心とは、高い市民性であるということもできるでしょう。英語教育を通じて、どのように生徒・学生諸君の市民性を高めていくのか、具体的な方策はもちろん、精神的な次元に於いても教育に携わる皆様とご一緒に意見を分かち合いたいと思います。

【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、南山大学外国語学部英米学科（学士）、ダーラム大学大学院（修士）、ニューカッスル大学現代言語研究科専任講師（日本語）、名古屋明德短期大学英語科助手・講師・助教授、星城大学経営学部助教授を経て、2007年から星城大学経営学部准教授。

■担当科目：英語Ⅲ・Ⅳ、総合英語Ⅰ・Ⅱ、英語討論、TOEIC 英語Ⅱ、言語文化、文化教養ゼミⅠ・Ⅱ、社会探索ゼミ

■主な著書・論文など

- ・「メシアニック・ジューに関する覚書」『星城大学 人文研究論叢 Vol.6』2010年
- ・『レフト・ビハインド』と千年期前再臨説とアメリカ保守派についての覚書『星城大学 人文研究論叢 Vol.5』2009年
- ・『レフト・ビハインド』に見られる反キリスト像についての覚書『星城大学 人文研究論叢 Vol.4』2008年

I 専門分野

英語教育、福音主義キリスト教、異文化理解

II 研究テーマ

1. 英語素材に見られる宗教的背景
2. 市民性の育成という目的に合致した英語教育

III 研究紹介

1. 英語素材に見られる宗教的背景の分析をしています。現在は主に、*The Christian Film and Television Commission* の代表で、*MOVIEGUIDE* と冠されたウェブサイトならびに同名ジャーナル主宰者のテッド・ベア (Ted Baehr) 氏 (米国) が推奨する映画・TV ドラマ作品とその背景を検討しています。日本で積極的に紹介されている作品には、『デスパレートな妻たち』(NHK 米ドラマ) など、人格教育という視点からは疑問視せざるを得ないものが目立ちます。一方、『*The Blind Side*』(2009年) (邦題：しあわせの隠れ場所) に見られるように、アメリカで成功しても日本で積極的に紹介されない作品には、“アメリカの良心”ともいふべき倫理的個人主義を涵養するものが少なくありません。倫理的個人主義は、広く民主国家において求められる善き市民すなわち“成熟した個人”に必須の資質であり、キリスト教およびキリスト教と並行して存在するアメリカ市民宗教の価値観と合致するものです。日本も民主国家であり、個人主義とは、基本的に個人の尊厳を意味するのであって、利己主義に墮することではあってはならないはずで、す。“日本の良心”ともいふべき倫理的個人主義の涵養が望まれるのではないかと思いつつ取り組んでおります。
2. グローバル社会および広く民主国家において求められる市民性の育成という目的に合致した英語教育の在り方を模索しています。加藤知子准教授との共同研究として、TOEIC®テスト新公式問題集に見られる英語素材の分析をし、そこに見られる徳性に注目しましたが、そのような素材を用いた授業運営方法を模索しています。

【参考】

- プロフィール：愛知県東海市生まれ、南山大学外国語学部英米学科 (学士)、南山大学外国語センターL.L. 教務助手、セント・マイケルズ大学大学院 (TESL 修士) / 国際ロータリー財団奨学生、名古屋明德短期大学英語科専任助手・講師・助教授、2003年から星城大学経営学部専任助教授/准教授。
- 担当科目：英語Ⅲ・Ⅳ、総合英語Ⅰ・Ⅱ、TOEIC 英語Ⅲ、文化教養ゼミⅠ・Ⅱ、社会探索ゼミ
- 所属学会：大学教育学会、外国語教育メディア学会、異文化コミュニケーション学会など
- 主な著書・論文など
 - ・「日本人短大生と『家庭』の果たす役割～異文化ホームステイ・プログラムが提示する教育的課題」2001年、名古屋明德短期大学『紀要』第16号所収、単著
 - ・「星城大学におけるオリジナル英語教材作成および使用の試み—Hiplus for Campus を利用して」2005年、『外国語メディア教育学会(LET)第45回全国研究大会・総会発表要項』所収、共著
 - ・「教養教育という視点から見た『TOEIC®テスト新公式問題集』」2010年、『大学教育学会第32回大会発表要旨集録』所収、共著

I 専門分野

コーポレートファイナンス、M&A (デューディリジェンス・出口戦略策定)、内部監査

II 研究テーマ (地域企業関連分野)

1. 中小企業の企業価値向上への施策
2. サステナブル企業に向けた業務改革

III 研究紹介

- (1) 【中小企業の潜在価値の顕在化】中小企業に存在する価値資産の多くは、それを顕在化する手段の欠如から潜在化したままです。そうした価値を評価、顕在化する具体的な方策について検討します。また、資金調達から資本政策 (ベンチャー投資資金、M&A活用の出口戦略など) まで財務面からの取り組みも検討します。
- (2) 【サステナブル企業にむけた業務改革】日本には伝統的な技術や製法を有しながら拡大路線を取らず、200年以上の歴史を有する地域型企業が 3,000 社以上も存在します。そのビジネス・モデルは伝統という非効率性の堅守と、現代流の効率性を追及する経営手法の両立によるいわばサステナブル・モデルです。このモデルをいかにして築くか、具体的な業務フロー、管理手法について提言を行います。

上記の内容にご関心をお持ちいただきました場合は、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

- プロフィール：大手情報通信会社にて国内外の投資関連業務に従事。経済学博士。星城大学経営学部 准教授 (2010～)。
- 担当科目：会計学、電子会計、管理会計、簿記。
- 主な著書・論文など
 - ・ 「会計情報を用いた持続的利益の予測可能性」京都大学経済学会モノグラフ (発行番号 200909184)
 - ・ 「会計情報と企業価値評価モデル」-OJ モデルの構造と応用可能性 中央経済社、『企業会計』 Vol.61 No.3 142～148 頁

I 専門分野

英語、ビジネス英語、異文化理解

II 研究テーマ

CMMS/Seijoh Project

III 研究紹介

This project took place between two groups of students during the second semester. One was a group of some of my America study tour students, the other a class of foreign students studying English as a second language at CMMS at The University of Central Florida. The major goal of this project was for both groups of students to become familiar with using English as a means of communication. I wanted my students to get used to speaking in English and I wanted them to have the opportunity to develop friendships with students from other parts of the world.

【参考】

■担当科目

英語、英語話術、ビジネス英語、異文化理解演習、海外ビジネスセミナー、社会探索ゼミなど。
その他授業外教育として、アメリカスタディツアー、海外留学支援、ゴルフ部顧問など。

■社会的活動

東海市しあわせ村センター英語研究会、東海市勤労センター英語研究会、アメリカ語学研修に関する調査 (University of Central Florida、Lane Community College、University of North Carolina)、全国語学教育学会 会員、Computer Assisted Language Instruction Consortium 会員、東海市国際交流協会英語スピーチフェスティバル 審査委員長、第 34 回ライオンズインターハイスピーチコンテスト 審査・講演など。

■最近の論文など

- ・ Attending University in America 2009/5 月 東海市公民館英語研究会 第 24 号 pp.6-7
- ・ The Holiday Season 2009/12 月 東海市公民館英語研究会 第 25 号 pp.6-7

I 専門分野

社会システム工学、経営工学、教育工学

II 研究テーマ

1. シミュレーションによるビジネスプロセス改善
2. ビジネスゲームによるエグゼクティブ養成
3. シリアスゲームによる職業教育訓練

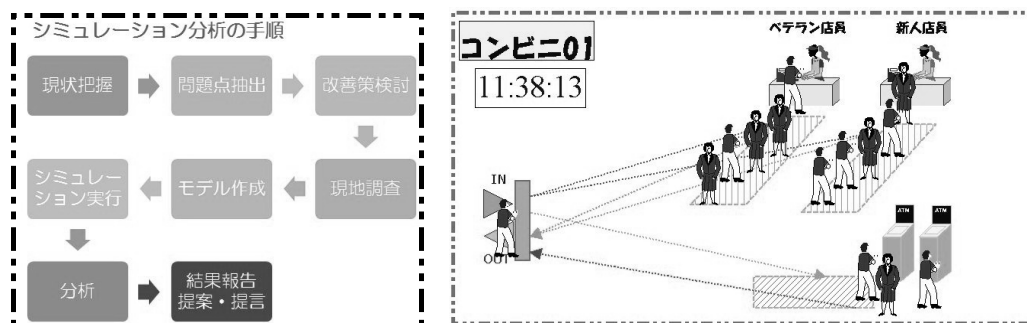
III 研究紹介

限られた経営資源を活用して厳しい企業間競争を勝ち抜くには、いわゆる「勘・経験・どんぶり勘定」の経営手法から脱却し、科学的な事前の予測に基づく経営に舵を切る必要があります。科学的な予測の手法として、統計解析と並んでポピュラーな手法、それがシミュレーションです。

シミュレーションは「**現実世界をコンピュータ上に再現し、実験を繰り返すことにより、現実問題への解決策を探る**」手法です。グローバルな競争が強られる現在、海外企業の経営陣はMBAで身につけた、シミュレーションなどの科学的手法を経営にうまく取り入れています。

どの部門を強化すれば良いのか？、設備投資の効果はどうか？、配送ルートは最適か？、少ない人員で仕事をこなすにはどうしたら良いのか？など、シミュレーションを活用した予測によって、**ビジネスで想定されるほとんどすべての問題に対して、最善の意思決定**を行えます。

シミュレーションで将来の見通しを得たいとお考えの方は、お気軽にお問い合わせください。



【参考】

- プロフィール：愛知県西尾市生まれ、名古屋大学経済学部卒業、名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程修了、博士（経済学）取得。同大研究員を経て、2006年10月から星城大学経営学部講師
- 担当科目：情報システム論、インターネット基礎論、プログラミング演習、情報処理演習
- 社会的活動：日本情報経営学会 大会委員会委員、組織委員会幹事、日本経営システム学会 評議員
- 主な著書・論文など
 - ・『シミュレーション-Arena を活用した総合的アプローチ（第4版）』2007年、コロナ社、翻訳
 - ・「エージェントベースシミュレーションによる JIT 生産システムのモデリング」2010年、『星城大学経営学部研究紀要』Vol.10、pp. 31-46、単著
 - ・「デジタルゲームを活用したシリアスゲームによる経営学教育実践の試行」2010年、第61回日本情報経営学会全国大会、本学経営学部 天野圭二准教授と共同発表

I 専門分野

国際経済, 国際労働力移動

II 研究テーマ

1. 地域経済における外国人労働者の分析
2. 企業に必要とされるグローバル人材に関する考察

III 研究紹介

1. 日本における外国人労働者に関する議論は、1980年代に始まりましたが、円高やバブル期における人手不足などが契機となり、日系人には門戸が開かれることになりました。1990年以降、日系ブラジル人をはじめ、南米からの労働者が東海地域の企業でも数多く就労しています。

私は、国境を越えて働く人々に関心を持ち、特に米国などへの移民を中心として人の移動に関する研究を進めてきました。近年では、日系の外国人労働者が集住する東海地域での状況に注目していますが、外国人労働者は単に労働者だけでなく生活者としての側面も持ちます。外国人労働者は地域経済にどのような影響をもたらすのか。あるいは、企業にとって外国人労働者と日本人労働者の雇用はどんな意味を持つのか。また、国レベルにおいても地域レベルにおいても、経済的な側面のほか、福祉や教育など様々な分野にわたる問題も含んでいます。こうした問題について、学術的な側面から考察を加えることによって、現実的な問題への考え方や対応に何らかのお役に立てないかと考えています。

2. 上述1.の件に関連しますが、現在、米国をはじめ世界の国々では、単純労働に従事する外国人労働者の受け入れに消極的になる一方で、高い技術や技能を持ったいわゆる専門職労働者（頭脳労働者）を積極的に受入れる政策をとっています。高い技能を持つ労働者も、そうした国へ積極的に出向きます。日本の企業でも、海外での事業展開においてそうしたグローバル人材は欠かせない存在になってきていると言われてしています。そのようななかで、日本人の若者は、これから働こうというこの地域の若者は、一体どのような資質が求められているのでしょうか。そして、グローバル人材を育てるために、大学教育には何が求められているのでしょうか。実際にそうした人材を必要とする企業の方々と協同して考えていくことができれば、と考えています。

【参考】

- プロフィール：愛知県立大学外国語学部英米学科卒業、(旧)東京銀行勤務を経て名古屋大学大学院経済学研究科博士後期過程修了(経済学博士)、2006年から星城大学経営学部勤務
- 担当科目：経済学概論、経済政策
- 社会的活動：東海市市特別報酬等審議会委員、フルブライト中部同窓会役員
- 主な著書・論文など
 - ・『国際経済学の基礎 100』2007年、創成社、共著
 - ・「米国移民政策から見る日本の外国人労働者問題への一考察—頭脳循環からウィンウィン循環へ」2008年、『地域学研究』第37巻第4号所収、単著
 - ・「東海地域における外国人労働者の実態と特徴・中国人と日系ブラジル人を中心に -」2008年、星城大学経営学部『研究紀要』第5号所収、共著。

I 専門分野

言語学、日本語学、日本語教育

II 研究テーマ

1. 日本語の文法に関する研究
2. 異文化交流に関する研究

III 私にできること・したいこと

1. 少し前に「日本人の知らない日本語」(蛇蔵&海野風子)という本が話題になっていましたが、日本人が説明できない日本語がたくさんあります。日本人(日本語話者)は日本語を何も考えずに使いこなしていますが、なぜ、そこでそのように言うのかなどと聞かれると非常に困ってしまうのです。私は星城大学で、留学生に日本語を教えています。日本語を教えながら、日々、このような説明できない問題にぶつかり、その中から研究のテーマの種を拾っています。

昨今はグローバル社会になり、外国人と出会う機会も多くなってきました。そんな時、日本語について聞かれて困ったことがあれば、ご相談ください。実は、まだ説明できないことはたくさんあります。研究者の間でも論争中の問題もありますし、あるいは、まったく気づいていない問題もたくさんあると思います。ですから、全部はお答えできないかもしれませんが、一緒に考えることはできます。

また、ボランティアで日本語を教えていらっしゃる方で、教材や教授法で悩んでいらっしゃる場合もご相談に乗ります。学習者のレベルやニーズに合わせた教え方をしなければなりません。いろいろな条件もあり、難しいことだと思います。ですが、なるべく理想に近い形にできるように工夫することはできると思います。

2. 星城大学には多くの外国人留学生が在籍しています。彼らは日本の文化に大変興味を持っています。地域の方々と交流する良い機会があれば、お知らせください。留学生との橋渡しのお手伝いができると思います。留学生にとっても、よい経験になると思います。

【参考】

- プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、南山大学文学部卒業、名古屋女子大学短期大学部英語科助手、南山大学大学院外国語研究科修士課程修了（日本語教育修士）、2003年から星城大学経営学部講師、2008年から星城大学経営学部准教授

- 担当科目：日本語Ⅰ、日本語Ⅱ、日本語スピーチ、異文化コミュニケーション

■主な著書・論文など

- ・「知っている」の否定形 2005年、星城大学『人文研究論叢』第1号所収、単著
- ・「日本語の空の機能範疇」2008年、星城大学『人文研究論叢』第4号所収、単著
- ・「形容詞・形容動詞の屈折をめぐって」2010年、南山大学『南山大学日本文化学科論集』第10号所収、共著

I 専門分野

英語教育学、言語習得論、応用言語学

II 研究テーマ

1. 英語の授業研究
2. 小学校「外国語活動」のあり方

III 研究紹介

1. 外国語である英語をどのように教えれば、生徒が英語を使えるようになるのかに関する研究を行っています。中学校・高等学校では、『学習指導要領』でコミュニケーション能力を伸長するようにとされていますが、どのようなことを授業で行えばよいのかについては、現場の教師に任せられているのが現状です。具体的な言語活動を紹介し、目的を達成することのできる授業について共同研究ができる学校・先生を歓迎いたします。
2. H.23 年度より、小学校5・6年生で週1時間の「外国語活動」が必修化されます。どのような内容が適切であるのかについて、日本国内のみならず外国での現状を実地研究しています。具体的な活動やカリキュラムの作成などについて、さまざまな事例をもとに、自校にふさわしいものを開発する支援を行っています。

【参考】

■プロフィール：京都市生まれ、京都市立中学校教諭、兵庫教育大学大学院学校教育研究科言語系コース修了、名古屋明德短期大学専任講師、星城大学経営学部専任講師を経て現職。

■担当科目：英語Ⅲ、英語Ⅳ、総合英語Ⅰ、総合英語Ⅱ、TOEICⅠ、
文化教養ゼミⅠ・Ⅱ、社会探索ゼミ

■社会的活動：全国英語教育学会、大学英語教育学会（JACET）

■主な著書・論文など

『実践的コミュニケーションのための英語のタスク活動と文法指導』共著 2000年 大修館書店

『文法項目別 英語のタスク活動とタスクー 34 の実践と評価』共著 2005年 大修館書店

“The Effects of Focused and Unfocused Written Corrective Feedback in an English as a Foreign Language Context,” *System* 36, Rod Ellis, Mihoko Murakami, Hideyuki Takashima. pp. 353-371. 2008.

I 専門分野

マルチメディア論(景観論)、都市計画学(都市交通論)、都市・生活情報論

II 研究テーマ

1. 地域 IC カード (無線 LAN から RFID まで)
2. コミュニティバス (道路網、公共交通網の計画)
3. 都市計画学 (景観論・都市交通論)

III 研究紹介

1. IC カードって、ご存知でしょうか？ 近年、電子マネーとしてよく使われます。これを、地域カードとして使えないか、研究しています。もともとは、この大学の学生証としても、用いられたのですが、もうすぐ鉄道会社が新しいカードを出すと聞いています。昨年度より、研究会を開いています。東海まちづくり研究会よりはりだした WEB のような存在です。

私は、地域カードとして知多半島全域で非接触 IC カードによる、地域カードの実現を夢見ています。小銭の要らない、お年寄りにも優しいカード社会はいかがなものでしょうか。

2. コミュニティバスは、福祉のバスか？ ワンコインのバスが最近たくさん見られます。多くは、路線バスより小さな車体で細い道に入ったりするので、一度乗るとなかなか便利なバスです。しかし、乗りたいときに来てくれず、また遠回りをします。時間に余裕のないときには乗れません。

私は、路線も大事ですが、公共交通には頻度もある程度必要ではないかと思います。そのためには、幹線公共交通との乗り継ぎが必要であると思います。なんとかうまく走らせることはできないものかと思っています。

3. 全世界的に見て、自動車に乗れるくらい経済的に豊かな人が増えてきました。なんとか、燃料の奪い合いをせずに、暮らせないかと考えています。ソーラー発電、グリッド情報など、いろいろと情報交換しませんか？

【参考】

■プロフィール：京都市生まれ、京都大学工学部土木工学科卒業、京都大学大学院工学研究科修士課程修了(工学修士)、岡山大学工学部助手、岐阜聖徳学園大学助教授、2002 年から星城大学経営学部准教授

■担当科目：マルチメディア情報論、経営科学、都市情報論、生活情報論、都市計画論、都市交通論

■社会的活動：東海市都市計画マスタープラン委員、岐阜市長良川フォーラム、日本交通政策研究会低炭素社会の交通運用研究グループ研究員

■主な著書・論文など

- ・『すぐわかる計画数学』1998 年、コロナ社、共著
- ・ユビキタス環境の街づくり 2003 年、オフィスオートメーション学会誌 単著
- ・はんだの祭と岸和田だんじり祭の比較 2009 年、星城大学経営学部『研究紀要』第 8 号所収、単著
- ・知多地域における地域 IC カード 2010 年、情報経営学会 単著
- ・コミュニティバス 2010 年、星城大学経営学部『研究紀要』第 10 号所収、単著

I 専門分野

スポーツマネジメント、スポーツ社会学、スポーツビジネス

II 研究テーマ

1. 地域スポーツクラブの少子・高齢化社会に及ぼす影響に関する研究
2. 競技スポーツのチームマネジメントに関する研究

III 研究紹介

1. 現代社会において少子・高齢化が叫ばれていますが、「健康」というキーワードの下、様々な取り組みがなされています。この問題解決において、運動・スポーツの役割が非常に大きいと言われています。

現在、文部科学省が推進する「総合型地域スポーツクラブ」の存在が、今後の日本のスポーツ状況を大きく変えるのではないかと考えられており、それによって日本社会が抱える諸問題にどのような影響を与えるのかを考えていきます。

2. 私は、競技スポーツの指導者として対象を大学生に現場で指導を行っております。そこでは伝統大学とは違い新設の大学ということもあり、一からのスタートです。そのため、チーム立ち上げにむけての準備、新興勢力による周囲からの協力不足などチームを運営・管理する能力が問われます。本大学の状況を事例研究として、競技スポーツのチームマネジメントに関する研究活動を行っていきます。

【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、中京大学体育学部卒業、中京大学大学院体育学研究科博士課程単位取得退学（体育学修士）、2004年から星城大学経営学部講師、2010年から准教授

■担当科目：スポーツマネジメント論、生涯スポーツ論、体育・スポーツ社会学、コーチング論

■社会的活動：愛知大学野球連盟理事、日本体育学会、日本スポーツ社会学会

■主な著書・論文など

- ・「高公野球の持つ価値と問題性に関する一考察」1997年、『中京大学論叢』第38巻第2号、共著
- ・「生涯スポーツイベント参加者がもたらす大会参加総支出額の試算」1997年、『東海保健体育科学』第19巻 共著
- ・「生涯スポーツイベントにおける消費行動」1998年、『中京大学論叢』第39巻第2号、共著
- ・「大学生のスポーツ活動へのコミットメントに関する一考察」星城大学『研究紀要』第9号 単著

I. 専門分野

臨床心理学、健康支援学、異文化適応

II. 研究テーマ

1. 家庭、学校、職場、地域におけるメンタルヘルス
2. 身体健康と心の健康の相関に関する研究
3. 新しい環境への適応に関する研究

III. 研究紹介

1. 私は現在、学生相談室で学生のカウンセリング、教職員のためのコンサルテーション、学外専門機関との連携などに携わっていますが、大学生に限らず、乳幼児、小・中・高校生、社会人、高齢者など、さまざまな年代の方々のメンタルヘルスに興味を持ち相談活動や講演を行っています。臨床心理士としての専門知識と経験を生かし、今後は地域に根ざしたこころの健康の増進のための研究・活動を進めていきたいと思っています。
2. 身体と心は、互いに切っても切れない関係にあります。たとえば、気分が落ち込んだりイライラしている人は、身体に余計な緊張があったり痛みを感じている場合があります。また、身体の具合が悪かったり慢性の症状や痛みがある場合、心にも大きなストレスがかかっています。自分の身体の状態に意識を向け、無駄な緊張をほぐし、自己コントロール感を高めていくことと心の健康度との関連性について興味を持って研究しています。
3. 世界のグローバル化が進み、多くの人々が外国に出ていくようになりました。その一方で、海外から日本に入ってくる外国人も急増しています。地域では日本にしながら異文化接触・適応体験をしているということが起こっているのではないのでしょうか。これまで、異文化接触の問題は、文化人類学・社会心理学の分野で多くの研究がなされてきましたが、個々の人間の心の中で何が起きているのか、どのようにして新しい環境に適応していくのかという問題については、まだ、それほど多くの研究がなされていません。私は、臨床心理学の立場から、異文化体験をした時に心の中で何が起きているのか、不適応に陥った場合に、どのような支援が有効かということについて研究を行っています。

【参考】

- プロフィール：福岡県福岡生まれ、臨床心理士 (No.16958)、西南学院大学文学部児童教育学科卒業、福岡教育大学大学院教育学研究科修士課程修了 (教育学修士)、英国ダーラム大学大学院カウンセリング&ガイダンス研究科修士課程修了 (カウンセリング&ガイダンス修士)、英国ダーラム大学大学院教育学研究科博士課程修了 (教育学博士)、精神科病院勤務、公的機関相談員、専門学校等講師、愛知県スクールカウンセラーを経て 2009 年から星城大学経営学部特任講師、学生相談室相談員
- 担当科目：心理学、臨床心理学、精神医学
- 主な著書・論文など
 - ・ 「高齢化社会における人間関係に関する一研究」1991 年、『福岡教育大学紀要』第 41 号所収、単著
 - ・ 「留学生の心理的体験に関する一研究」2009 年、星城大学『人文研究論叢』第 5 号所収、単著
 - 「身体を通しての心へのアプローチ：臨床動作法についての覚書」2010 年、星城大学『人文研究論叢』第 6 号所収、単著

I 専門分野

現代中国語文法、中国語教育、言語学

II 研究テーマ

民間の中国語学習者に対する教育とその普及

III 研究紹介

民間では、地域のカルチャーセンター等で中国語講座が開講されています。しかしながら、幅広い年齢層や中国語学習の経験により、習得レベルに差があるといったように、経歴の異なる方々が同時に受講しているケースが多々見られ、授業をスムーズに行えないといった問題が発生しています。

このような問題を解決するには、クラスレベルの細分化、少人数制クラスの設置、それに伴う講師の増加などが必要であると考えられます。そこで、地域との連携により、公共施設を利用した複数の教室開講、地域と密着した講師の確保や地域の方々と講師との協力に基づいた教室運営といった方法が挙げられます。

また、中国語や中国文化に興味をもつ人達が協力し合うことにより、イベント等の企画開催も行うことができ、更なる地域活性化が期待できると思われれます。

中国語講座の開講や運営に関してご相談がある際には、どうぞお気軽にご連絡ください。

【参考】

- プロフィール：三重県いなべ市生まれ、名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程修了、2009年から星城大学経営学部講師
- 担当科目：中国語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、文化教養ゼミⅠ・Ⅱ、社会探索ゼミ
- 社会的活動：日本中国語学会会員、中国語教育学会会員、日中対照言語学会会員
- 主な著書・論文など
 - ・“试论“头”的基本义和语义扩展”（訳：「“頭”の基本義とその意味拡張について」）2005年、名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻『多元文化』第5号所収、単著
 - ・「現代中国語における再帰表現に関する一考察——「V+身体部位 N」の形式を中心に」2008年、名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻『多元文化』第8号所収、単著
 - ・「中国語の再帰表現における他動性と客体化の関連性——「V+身体部位 N」の形式を中心に」2008年、『星城大学人文研究論叢』第4号所収、単著
 - ・「現代中国語における“被”構文と主題文について——「V+身体部位 N」形式の再帰表現を中心に」2009年、『星城大学人文研究論叢』第5号所収、単著
 - ・「現代中国語の再帰表現における受身文への適性に関する一考察——「身体部位 N+被+N_a+VP」形式を中心に」2010年、『星城大学人文研究論叢』第6号所収、単著

リハビリテーション 学部

I 専門分野

理学療法学、健康支援学

II 研究テーマ

1. 障害者のスポーツ (健康支援)
2. 理学療法士教育

III 研究紹介

1. 1981年以降、障害者の健康支援の観点から、受傷から退院までの理学療法、および社会復帰後は障害者のスポーツをテーマに研究を継続している。特に、脊髄損傷者の運動生理、運動パフォーマンスの改善、健康の維持・増進に取り組んでいる。
2. 2002年以降は、上記に加え、理学療法士の教育、特に卒前教育としての臨床実習、卒後教育としての新人教育に力を入れ取り組んでいる。

【参考】

■プロフィール：九州リハビリテーション大学校理学療法学科卒、理学療法士、産業医科大学病院リハビリテーション部勤務、佛教大学社会学部社会福祉学科卒業、社会福祉士、経営学修士（九州産業大学）、医学博士（産業医科大学）、2002年から星城大学リハビリテーション学部教授

■担当科目：リハビリテーション概論、理学療法学概論、運動療法学、義肢装具学、他

■社会的活動：社団法人日本理学療法士協会教育部部員、日本義肢装具学会会員、日本災害医学会会員、日本体力医学会会員、日本脊髄損傷医学会会員、日本臨床スポーツ医学会会員、愛知県理学療法士会会員、日本障害者スポーツ学会常任理事、日本リハビリテーション推進研究会理事

■主な著書・論文など

- ・「臨床で学ぶことの意味」2010年、『実践理学療法スキル』所収、医歯薬出版、単著
- ・『運動療法学テキスト』2010年、南江堂、共編著
- ・Longitudinal Changes in Physical Capacity Over 20 Years in Athlete With Spinal Cord Injury. *Arch Phys Med Rehabil* Vol.91, 2010, 共著
- ・「脊髄損傷者の生活習慣病予防におけるスポーツの効果」日本障害者スポーツ学会誌 18、2010、共著

著

I 専門分野

神経科学、神経解剖学、歯科医学

II 研究テーマ

1. 噛むこと（チューイング）によるストレス緩和機構の解明
2. 噛むことによる脳賦活機構の解明

III 研究紹介

1. 噛むこと（咀嚼運動）によるストレス緩和機構の解明

社会構造の急激な変化に伴い人々は計り知れないストレス環境下におかれ、精神疾患をはじめとするストレス性疾患が急増しています。このため、ストレス対策が我が国の重要な課題となっています。最近我々の研究から、ストレスを受けている時に積極的にガムを噛む（咀嚼運動：チューイング）とストレスが緩和されることがわかってきました。現在、ヒトと動物を対象にチューイングによるストレス緩和機構を脳科学的に明らかにしようと研究を続けています。チューイングという極めて簡単な方法でストレスが緩和されるという研究成果は、現在のような過酷なストレス社会において朗報といえます。ストレス社会におけるストレス性疾患の予防にチューイングを応用できるようなシステム作りを行いたいと考えています。

2. 噛むことによる脳賦活機構の解明

我が国の急速な高齢化に伴い認知症を発症する高齢者が急増しており、認知症予防の対策の確立が切望されています。我々の研究から、噛むことにより脳の活性が高まることがわかってきました。その機構を脳科学的に解明するため研究を行っています。高齢化社会における認知症予防や脳リハビリに咀嚼運動の活用を行うシステム作りを考えています。

※我々の研究内容に興味を持たれた方々を対象に、分かりやすい講演をさせていただくことで地域交流に参加させていただこうと考えています。

【参考】

- プロフィール：和歌山県生まれ、朝日大学歯学部卒業、歯科医師、岐阜大学大学院医学研究科博士課程修了（医学博士）、朝日大学歯学部講師、2009年から星城大学リハビリテーション学部教授
- 担当科目：解剖学、解剖学実習
- 社会的活動：日本解剖学会、日本神経科学会、老年歯科医学会、SAM 研究協議会（評議員）
岐阜市保健医療審議会委員など
- 主な著書・論文など
 - ・ブラッシングによる脳賦活：fMRI による研究 成人における基礎的解析, 2008 年, 老年歯科医学, 共著.
 - ・咬合不全とストレス, 2008 年, 教育医学, 共著.
 - ・Chewing under restraint stress inhibits the stress-induced suppression of cell birth in the dentate gyrus of aged SAMP8 mice. 2009 年, Neuroscience Letters, 共著.

I. 専門分野

高齢者健康支援学、老年期作業療法学、社会疫学、認知症予防

II. 研究テーマ

1. 介護予防・認知症予防に関する研究

III. 研究紹介

高齢社会の日本では、介護予防の推進が課題となっています。私は、現在、心理社会面に着目した介護予防・認知症予防として、愛知県武豊町で「憩いのサロン」を活用したポピュレーション・アプローチによる地域介入研究に取り組んでいます。

【参考】

プロフィール: 広島県出身、1978年日本福祉大学社会福祉学部卒業、1982年国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院卒業、1982年から名古屋市厚生院、有馬温泉病院などで勤務、その後2003年茨城県立医療大学保健医療学部助教授、2005年星城大学リハビリテーション学部教授、博士（社会福祉学）

- 担当科目：老年期作業療法学、身体障害作業療法学、作業療法学概論など
- 所属学会：日本作業療法士協会、日本公衆衛生学会、日本老年精神医学会、日本認知症ケア学会、日本老年社会科学会など
- 社会的活動：日本認知症ケア学会評議員、日本老年精神医学会他職種協働推進委員会委員、日本作業療法士協会養成教育のあり方委員会委員長

主な要著書・論文

- 1) Health Inequalities in Japan : An Empirical Study of the Older People. Trans Pacific Press, Melbourne. 分担執筆、2010
- 2) 「認知症の作業療法」医歯薬出版、編著、2009
- 3) 「検証健康格差社会 介護予防に向けた社会疫学的大規模調査」医学書院、分担執筆、2007
- 4) 「認知症ケアの実際Ⅱ各論」ワールドプランニング、分担執筆、2004年
- 5) 竹田徳則、他：地域在住高齢者における認知症を伴う要介護認定の心理社会的危険因子—AGESプロジェクト3年間のコホート研究。日本公衆衛生雑誌（査読有、印刷中）
- 6) 竹田徳則、近藤克則、平井寛：心理社会面に着目した認知症予防のための介入研究—ポピュレーション戦略に基づく介入プログラム理論と中間アウトカム評価—。作業療法 28 : 178-186、2009（査読有）
- 7) 竹田徳則：ポピュレーション戦略による認知症予防。認知症ケア事例ジャーナル 1 : 437-444、2009
- 8) 竹田徳則：介護予防、認知症。作業療法ジャーナル 42 : 665-669、2008
- 9) 竹田徳則、近藤克則、平井寛、村田千代栄：地域在住高齢者の認知症発症と心理・社会面のとの関連。作業療法 26 : 55-65、2007（査読有）

I 専門分野

辺境文化、比較文化、芸術一般

II 研究テーマ

1. 戦争や災害で破壊された文化財の修復
2. 地域におけるコミュニティの役割について

III 研究紹介

1. かつて日本では、地縁・血縁といった「同族意識」の中に人々の暮らしが包括されていました。しかし個人主義の風潮が極度に成熟した現代社会に於いて、日常生活は、それ自体が独立性を有し、他者からの干渉を極度に嫌うものへと変質を遂げてきました。それは、人間としての自由を十分に獲得した一方で、思いやり・いたわりあいといった原初的な感性を、時代の激流の中に置き忘れてしまった感があります。様々な理由で他者との関係を断ち切った若者、病の身を一人暮らしの床に横たえる老人、そして、やがて訪れる孤独な死——日々の暮らしの中で失われた“人間らしい生活”を取り戻すために、いま我々が所属するコミュニティは如何なる「人間の環」を構築すべきか、を考えます。
2. 毎年、本学の大学祭「星祭」に、この地域に関するシンポジウムを開催しておりますが、本10年度は「無縁社会に求められるコミュニティの絆」（東海市、中日新聞社など後援）を、パネリストに、自らも家族介護の体験を持つ女優の真理アンヌさん、社会福祉の先進国デンマークで高齢者の共同住宅の設計を続ける建築家の齋藤光代さん、毎日新聞編集委員時代は子供から老人に至る人間模様取材した現・福祉ジャーナリストの横田一さん、東海市市民福祉部次長として地域の福祉行政にあたる神野規男さんらを招き、それに小生が司会進行役を兼ねて加わりました。また本学の中島英司教授、古川公宣准教授、阿部友和助教が、途中、それぞれの専門分野からレポート。一般市民を含む約100名が、熱心に耳を傾けました。

■プロフィール：東京都大田区生まれ、早稲田大学教育学部卒業、同・大学院文学研究科（西洋史学専攻）修士課程修了（文学修士）。その間、ブルガリア国立ソフィア大学留学。早稲田大学文学部副手、東海大学講師・助教授を経て現職。ベースボール・マガジン社ライター、美術評論家、音楽評論家。テレビ・ラジオ・新聞・雑誌など、多彩な分野で独自の文化論を展開。2007年から現職。

■担当科目：文化教養ゼミ、政治学、社会学、日本文化論、総合ことば演習

■社会的活動：国際交流基金の助成事業として、ラトヴィア・リトアニア・グルジア・ウクライナ・デンマーク・オーストリア・ドイツなどで、映画上映（日本大使館）、コンサート（音楽大学）、文化講演会（大学）などによる「日本文化週間」を主宰。外務省関連団体の留学生選考委員。科学技術庁委託「アジアにおける原子力安全調査」団員など。

■主な著書

- （単著）・『ヨーロッパ辺境紀行』1993年、恒文社 ・『学生野球の首領 島岡吉郎』1979年、（同）
- （共著）・『日米安保と沖縄問題』1997年 社会評論社、
- ・『オーストリア 統合その夢と現実』2001年、東海大学出版会
- ・『ドラッグ：新しい脅威と人間の安全保障』2003年、東海大学出版会
- ・『日露オーラルヒストリー はざまで生きた証言』2007年、彩流社

I 専門分野

哲学、倫理学

II 研究テーマ

1. 私たちの高齢者観の倫理的問題
2. 高齢者の孤立や孤独をどうやわらげるか
3. コーポラティブ方式の可能性

III 研究紹介

1. わが国ではまもなく高齢人口が総人口の4割を占める超高齢社会を迎えます。世帯の構成も変化し、高齢者のいる世帯では3世代同居よりも高齢者夫婦のみの世帯の方が多くなり、独居高齢者も増加の一途をたどっています。コミュニティの再生など高齢期の孤独や孤立に社会的に対応することが求められています。

私は、1995年に春日井市に建設されたコーポラティブハウス「木附の里」に住人の一人として参加しました。コーポラティブ住宅とは、住まいを必要としている人たちが集まり、協力して土地を確保し、全体設計と個別設計を行い、工事を発注して建設される集合住宅のことです。住み手が計画の当初から参画するこの建設方式のうちに良好な近隣関係を形成する秘密があります。

住宅を建設するかどうかは別にしても、コーポラティブ方式には超高齢社会の孤独や孤立を解消するヒントが含まれています。学習会などがあれば参加したいと考えていますので、気軽に声をかけてください。

2. 私の祖母は、百歳を過ぎて「寝たきり」になり、101歳でリハビリを受けて「寝たきり」から脱け出しました。超高齢の「寝たきり」患者であっても十分なケアとリハビリを施せば「寝たきり」から脱け出し、その生活の質を豊かなものにできるのです。家族も目をみはるような生活の変化でした。祖母以外にも「寝たきり」から脱け出せる高齢者はたくさんおられると思います。

祖母が人間らしい暮らしを取り戻していく過程を写真に撮り、スライドにしました。機会があれば、ぜひ見ていただきたいと思います。

【参考】

■プロフィール：名古屋市生まれ、京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学（文学修士）、鹿屋体育大学講師、名古屋明德短期大学助教授を経て、2002年から星城大学リハビリテーション学部教授

■担当科目：哲学、倫理学、文化教養ゼミ、ボランティア演習

■社会的活動：東海市個人情報保護審査会委員

■主な著書・論文など

- ・『百歳を過ぎても「寝たきり」から脱け出せる』2009年、一粒社、単著
- ・「集合住宅の建替えと高齢者の居住の安定」2006年、星城大学『人文研究論叢』第2号、単著
- ・『心と認識－実在論的パースペクティブ－』1997年、昭和堂、共著
- ・「コーポラティブ住宅の試みと人間の共同性」1996年、名古屋明德短期大学『紀要』第11号、単著

I 専門分野

応用言語学、教材開発、翻訳論

II 研究テーマ

1. 英語教材開発研究
2. コンピューター教材開発

III 研究紹介

私の研究は教授法で、教材についていろいろ研究している。例えば、同じ材料（新聞の記事や会話）をいじることで初級・中級・上級の教材を作ることができる。特に英語力が低い人のための教材を考え、新しい練習方法を作っている。作ったものを試し、それから学生の反応や教材の効果というフィードバックをもとに改善していく。このように、学生を教材に合わせるのではなく、教材を学生に合わせるわけである。

【参考】アメリカ生まれ、テンプル大学大学院教育学研究科博士課程修了（教育学博士）、2002年から星城大学リハビリテーション学部教授

■担当科目：英語 I、英語 II、総合英語 I、総合英語 II、ビジネス英語 I

■社会的活動：全国外国語教育学会[JALT]教材作成支部・会計担当者、JALT の内部監査の一人

■主な著書・論文など

- 1998 *The Effect of Learning Nouns in Lexical Sets*. Dissertation submitted in partial fulfillment for the degree of Doctor of Education, Graduate Division, Department of Curriculum, Instruction and Technology in Education.
- 2002 *The Changing Face of CALL: Emerging Technologies, Emerging Pedagogies*. Proceedings of the 6th Annual JALT CALL Conference, Kanto Gakuen University.
- 2006 Logic Puzzles for Fun and Review. *JALT Applied Materials CD-ROM: 59-62*.
- 2006 Single-page, multiple-view Web pages for reading ease. *The JALT CALL Journal*, 2(3), 53-61.
- 1995 Considerations for expanding a computer laboratory. *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College #9*. 111-132.
- 1994 The reading process as indicated by lexical inferencing. *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College #6*. 27-48.

I 専門分野

理学療法学・健康支援学

II 研究テーマ

日常生活行動と健康支援

III 研究紹介

- ①「日常生活行動と健康支援」をテーマに研究活動を行っています。現在、病院・施設に入院・入所または外来受診されている要支援・要介護高齢者の方を対象に、日々の生活行動を身体活動量の観点から分析し、健康の維持・増進を図るための方策について検討しています。
- ②「高齢者の転倒予防」をテーマに研究活動を行っています。昨今、実際の動作に近い感覚でスポーツを体験できるゲームが脚光を浴びています。そこで、ゲームによる運動効果を検証し、高齢者の転倒予防を目的としたトレーニングメニューについて取り組んでいます。

【参考】

- プロフィール：愛知県生まれ、理学療法士、博士（医学）
- 担当科目：日常生活活動学、老年期障害理学療法学、地域理学療法学セミナー など
- 社会的活動：日本理学療法士協会、愛知県理学療法士会、理学療法科学学会、専門リハビリテーション研究会、シニアフィットネスリハビリテーション研究会などの会員
- 主な著書・論文など
 - ・「健常高齢者のゲームによる身体バランス機能における効果の検証」専門リハビリテーション 2010. 共著
 - ・『転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル』2008年、大伸社、共著
 - ・「State-Dependent Bidirectional Modification of Somatic Inhibition in Neocortical Pyramidal Cells」Neuron 2008. 共著
 - ・「Involvement of T-type Ca^{2+} channels in the potentiation of synaptic and visual responses during the critical period in rat visual cortex」EJN 2008. 共著

I 専門分野

English

II 研究テーマ

Listening comprehension, second language acquisition

III 研究紹介

I want to know how students learn English and how to teach them

【参考】

■プロフィール

Birthplace Hawaii, USA、University of Hawaii Bachelor of Business Administration、Graduate School, University of Hawaii Master of Arts, English as a Second Language

■担当科目

English conversation; wajitsu English story-telling and narration

■社会的活動

I am the chief judge at two English speech contests (in Ogaki City and Agui City). I also attend the Tokai City International Group's parties with Japanese and foreign members.

I 専門分野

西洋史 (ロシア中世史)

II 研究テーマ

1. 15世紀末期のモスクワ大公イヴァン3世による統一国家形成について。
2. 修道院長ヨーシフ・ヴォロツキーの修道思想。
3. ロシアのシベリア進出史。

III 研究紹介

1. 15世紀末期のロシアではこれまでの封建的な分領国家に代わり、近代的な統一国家が出現する。これは他のヨーロッパ諸国 (イギリスやフランスなど) における近代国家の誕生と期を一にする。その中心となったのはモスクワ大公イヴァン3世であった。彼はこれまでの封建的な分領国家を次々と併合し、そこに近代的な統治システムを導入し、統一国家を建設していく。その際、ロシア教会との協力なしではこの大事業はなしえず、教会行政が重要になってくる。国家と教会の関係を中心にして研究を続けてきた。

2. 当時の教会を代表する思想家で修道院長であったヨーシフ・ヴォロツキーの研究を通し、国家と教会の関係を考えることが重要である。

3. 自分にとっては比較的新しいテーマである。古くからロシア人は高価な毛皮を求めてシベリアに進出しようとしていた。しかし、モンゴル人をはじめとする他民族が建設した国家の影響で国家規模の進出はなかなか困難であった。モスクワ大公イヴァン4世の時代に入りモンゴル人の建設したカザン汗国を併合したのをきっかけに本格的なシベリア進出が始まる。その手段はオストローク (砦) を建設し、そこを拠点として東へ東へと進行していくというものであった。

[参考]

■プロフィール：和歌山県生まれ、現在千葉市在住、慶応義塾大学文学部卒業、同大学大学院文学研究科博士課程満期退学、平成5年より名古屋明德短期大学、平成15年より星城大学勤務。

■担当科目：歴史学、西洋文化論など

■社会的活動：「日本とロシアの友好と親善を進める愛知の会」理事

■主な著書・論文

『スラヴ世界とその周辺』 1993年、ナウーカ 共著

『ヨーロッパ世界と旅』 1997年、法政大学出版局 共著

『続ヨーロッパ世界と旅』 2001年 法政大学出版局 共著

『東シベリアの歴史と文化』 2005年 成文堂 共著

I 専門分野

日常生活活動学、健康支援学、高次脳機能障害治療学

II 研究テーマ

1. 認知症予防のための認知評価および生活評価方法の検討
2. アルツハイマー型認知症者の日常生活活動が、重症度によってどのように異なるのか

III 研究紹介

1. 我が国では、急速に高齢化が進行し、認知症および認知症前駆段階である軽度認知障害者が増加しています。現在、認知症予防事業が地域在住高齢者を対象に進められています。私は、東海市の介護予防事業における認知症予防と閉じこもり予防を目的とした「いきいき元気教室」において、参加者の認知面と生活面の維持を目的に取り組んでいます。
2. 認知症において最も比率の高いものはアルツハイマー型認知症です。アルツハイマー型認知症者に対する生活活動が、症状進行とともにどのように変化するのかについては、未だ検討が不十分です。現在、私は、アルツハイマー型認知症者の日常生活活動が、重症度によってどのように異なるのか調べています。このことを明らかにすることによって、アルツハイマー型認知症者の生活援助に寄与するものと考えています。

【参考】

- プロフィール：三重県いなべ市生まれ、国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院作業療法学科卒業、金沢大学大学院医学系研究科博士課程修了（保健学博士）、2006年から星城大学リハビリテーション学部講師
- 担当科目：高次脳機能障害作業療法学、日常生活活動学、生活支援機器演習、基礎作業学
- 社会的活動：東海市いきいき元気教室講師、愛知県学術部員、日本作業療法協会事例検討委員
- 主な著書・論文など
 - ・ Takashi Fujita, Masako Notoya, Nobuyuki Sunahara, et. al : Development and review of the validity of an “instrumental activities of daily living test” (IADL test) performed as a desk evaluation of patients with Alzheimer’s type of dementia, Journal of the Tsuruma Health Science Society : 1-13, 2010.
 - ・ 藤田高史, 二木淑子, 高橋美幸, 杉本まみ, 能登谷晶子 : 軽度アルツハイマー病者に対する遂行機能評価としての片づけ検査の妥当性, 作業療法 28 : 396-409, 2009.

I 専門分野

運動学、電気生理学、心身健康科学

II 研究テーマ

1. 腰部機能（慢性腰痛のメカニズム）分析
2. 膝関節機能分析
3. ミラーボックスによる治療効果の検証

III 研究紹介

1. 人類が4足歩行から2足歩行へ移行した際に、身体構造は4足歩行のままでした。そのため、腰痛という特異的な疾患が生まれました。アメリカでは、腰痛による社会的損失（腰痛による欠勤など）が大きな問題にもなっています。私は腰痛のメカニズムを、表面筋電計という機器を用いて分析する研究を行い、腰痛患者に特徴的な身体機能の変化を報告しています。
2. 膝関節は、高齢者だけでなく若年者においても障害されることが多い関節です。それ故、多くの年代において機能異常を発見することは、障害予防につながる近道であると言えます。私はこれまでに、若年健常者の膝関節機能分析を行い、その有効な指標を報告しています。
3. ミラーボックスは1996年に、インドの学者によって報告された鏡を用いた身体機能回復の治療法です。麻痺や痛みの改善に効果があるとされていますが、どのようなメカニズムによってその改善が起こるかは明らかにされていません。私はこれまでに、ミラーボックスを用いて図形描画を行った際に、被治療側に起こる筋機能の変化を測定し報告しています。

【参考】

- プロフィール：岐阜県海津市生まれ、国立療養所箱根病院附属リハビリテーション学院 理学療法学科卒業、人間総合科学大学大学院 心身健康科学研究科博士後期課程修了（心身健康科学博士）、2007年から星城大学勤務
- 担当科目：運動学、運動学実習、臨床運動学、情報処理演習など
- 社会的活動：日本理学療法協会、日本理学療法連盟、愛知県理学療法協会、日本臨床神経生理学会、日本心身健康科学会、シニアフィットネス研究会などの会員
- 主な著書・論文など
 - ・「学生のための物理療法学」 2004年、大学教育出版 共著
 - ・「転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル」2008年、大伸社 共著
 - ・「理学療法ゴールドマスターテキスト第2巻 運動療法学」2010年、メジカルビュー 共著
 - ・肩関節内転運動時の三角筋筋活動の表面筋電図学的分析—三角筋前部線維の活動に着目して— 2007年 心身健康科学 単著
 - ・Mirror Box 中の利き手の円描画動作が、非利き手に誘発する筋活動について 2010年 心身健康科学 共著

I 専門分野

文化人類学、歴史学

II 研究テーマ

1. 東海市の万歳
2. 「郊外都市」としての東海市の町づくり
3. 東海市の若者

III 研究紹介

以前石川県の大学にいた頃加賀友禅などの産業や能登・加賀の農村調査を経験しました。現在は東海市文化財調査委員として万歳の調査などを始めたところです。東海市の町づくりについては、文化人類学の立場から調べ始めています。具体的には「郊外都市」として東海市はどのような町づくりをしているか、です。先行研究では、住民が郊外都市に居住する理由として良好な環境、子供への良好な教育環境、自然とのふれあい（農業ができる）、歴史的文化的環境などが理由として挙げられるようです。地勢的、人口的に東海市は郊外の町です。しかし、郊外都市であることを東海市が意識して町づくりをしているかいは判然としません。条件は揃っていると思います。ランづくり、星城大学も参加する美化活動、花一杯運動、細井平洲の顕彰など。まだ地元のことはよく知りませんので皆様にはいろいろお教えいただければ幸いです。

【参考】

- プロフィール:長野県木曾郡生まれ、慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了、2003年より星城大学リハ学部准教授
- 担当科目:文化人類学、東洋文化論、総合ことば演習Ⅰ・Ⅱ、文化教養ゼミⅠ・Ⅱなど
- 所属学会:日本オリエント学会、日本中東学会、日本文化人類学学会
- 社会的活動:東海市文化財調査委員
- 主要著書・論文
 - ・「東海市の往時の万歳について」『研究報告とうかい』第2号 2009
 - ・「金沢一伝統・再生・アメニティー」(共) 御茶の水書房 1991
 - ・「新修根上町史、通史編」根上町役場 (共) 1995
 - ・「東海地域の社会と文化ーブレイン・コミュニティ」(共) 御茶の水書房 2002
 - ・「新編三好町誌別編 (共)」愛知県三好町 2007

I 専門分野

整形外科（手外科）分野におけるリハビリテーション、装具療法学、作業療法学

II 研究テーマ

1. 手の怪我とリハビリテーション

III 研究紹介

1. 手の怪我には様々な種類があります。手は脳で考えた日常生活における様々な動作を具体化するために、複雑な動きを行います。これらが怪我などで一旦失われてしまうと、直接的に日常生活における動作の障害につながります。医師により手術などの治療が行われますが、それだけでは十分とは言えません。つまり手術などの後にしっかりとリハビリを行わないと満足できる手の使用が出来ないのです。そこで、手のリハビリテーションでは様々な器具や装具を用いてなるべく良い状態で日常生活に復帰できるようお手伝いしています。怪我をされていない方でも、手のリハビリテーションに対しての基本的な知識があれば、手の状態を自分で管理する事が出来るかも知れません。

【参考】

- プロフィール：島根県出雲市生まれ、広島大学医学部保健学科作業療法学専攻卒業、広島大学大学院医学系研究科博士課程修了（保健学博士）広島土谷総合病院、名古屋掖済会病院、2010年から星城大学リハビリテーション学部
- 担当科目：身体障害作業療法学、義肢装具学、ハンドセラピー特論
- 社会的活動：NPO 法人ハンドフロンティア理事
- 主な著書・論文など
 - ・日本手外科学会雑誌投稿論文 3 編
 - ・愛知県作業療学会誌投稿論文 3 編など

I 専門分野

公衆衛生学、健康情報学、地域作業療法学

II 研究テーマ

1. 健康（医療・介護）に関する情報のあり方（つたえ方、うけとり方）に関する研究
2. 介護サービス提供者のストレスに関する研究

III 研究紹介

1. 人々の健康（医療・介護）に対する関心は高まっています。また、情報化社会において、巷には健康に関する玉石混合の情報があふれています。テレビやラジオ、インターネットなどには様々な情報が流れており、個人の意思決定に影響を及ぼしています。社会における健康情報のつたえ方・うけとり方などのコミュニケーションをみなおす時期にあるのではないのでしょうか。情報発信者の努力もさることながら、情報の受け手である消費者（市民）の情報リテラシーを高めるお手伝いができればと思います。
2. 高齢化が進むなか、介護サービス供給の安定化が求められています。しかし、マンパワーの不足が指摘されており、質の高い介護を継続的に提供することを困難にしています。私は、高齢者介護施設に勤務する職員の職業ストレスや離職に関する研究を実施してきました。介護サービス提供者である職員の離職を防ぎ、安定したサービス供給システムをめざすお手伝いが出来ればと思います。

【参考】

- プロフィール：大阪府生まれ、国立療養所近畿中央病院附属リハビリテーション学院作業療学科卒業、京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野専門職学位課程修了（社会健康医学修士（専門職））、総合病院リハビリテーション部・老人保健施設・通所および訪問リハビリテーション事業所・訪問看護ステーションにて作業療法士として勤務、専門学校専任教員・NPO 委託研究員を経て、2010 年から星城大学リハビリテーション学部講師
- 担当科目：地域作業療法学、基礎作業学、作業療法学特論Ⅲ
- 社会的活動：（社）日本作業療法士協会学会演題査読委員、（社）日本作業療法士協会、日本公衆衛生学会、日本疫学会、日本老年医学会、日本クリニカルパス学会、医療の質・安全学会、日本褥瘡学会、全国訪問リハビリテーション研究会、地域作業療法研究会、日本作業科学研究会、日本作業療法教育研究会
- 主な著書・論文など
 - ・More appropriate, practical outcome measures in clinical trials for rehabilitation: A survey of medical literature from 1996-2005. Asian J Occup Ther. 7: 13-22. 2009. （筆頭）
 - ・ヘルスコミュニケーション実践ガイド第一版. 日本評論社. 米国立がん研究所編. 中山健夫監修. 2008. （共同翻訳）

I 専門分野

作業療法学

II 研究テーマ

地域における高齢者の健康づくり

III 研究紹介

私は、これまで東海市社会福祉協議会および東海市保健福祉課が主催する運動教室に関わり、参加者への運動指導に関わってきました、その中で高齢者に対しての運動の効果を体力面からデータを収集し研究を行ってきました。

今後も継続して東海市社会福祉協議会および東海市保健福祉課と連携し、運動という面から高齢者の健康づくりのためのよりよい方法を検討するとともに気軽に参加できる運動教室の実施を目指したいと考えております。

【参考】

■プロフィール：

沖縄県那覇市生まれ

平成医療専門学院作業療法学科卒業

名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科博士前期課程修了（修士：生体情報）

2003年より星城大学リハビリテーション学部作業療法学専攻教勤務

■社会的活動：

東海市健康づくり推進会議委員

知多市障害者自立支援認定審査会委員

愛知県作業療法士会現職者共通研修委員長

■主な著書・論文など

- ・転倒予防のためのバランス運動の理論と実際、有限会社ナップ、2010年、共著
- ・高齢女性における下肢レジスタンス運動とバランス運動の体力への効果、星城大学リハビリテーション・システム開発研究所研究紀要4、p67-74、2009年、共著

I 専門分野

ロボット工学、リハビリテーション工学、リハビリテーション医学

II 研究テーマ

1. パワーアシスト機構を用いた介護負担の軽減に関する研究
2. 整形外科疾患罹患者・小児麻痺者・知的障害者の健康づくりに関する研究

III 研究紹介

1. 虚弱高齢者の増加に伴い、介護を受ける対象者の増加とともに、介護をする側の身体および精神的な負担度の増加が昨今の問題となっております。特に、身体的な負担度の増加は、介護職の離職率に大きく関わる深刻な要素となっております。そのような社会背景の中、近年ではロボットを用い、介護をする側の負担度を軽減させる試みが行われていますが、コストパフォーマンスの問題において、十分に普及できていないのが現状です。そこで当研究者は、コストパフォーマンスを低下させ、一般施設においても普及できる簡易的なロボットの開発に着手を始めようとしています。このロボットが開発されれば、介護者の身体的な負担度を軽減させるのみならず、高齢者の就職を促進し、介護職の定職率向上、および人材の確保に関わる社会的意義の高い活動と自負しております。これらの点を踏まえ、介護の方法に関わる諸問題に関してのご相談などに積極的に対応いたします。
2. 日本整形外科学会によれば、整形外科疾患罹患者は増加の一途をたどっております。近年では、本邦の医療保険圧潰に関わるとされる生活習慣病予備軍、いわゆるメタボリックシンドローム進展にロコモティブシンドロームが大きく関わるということが知られています。近年では、ロコモティブシンドロームの一端が解明されつつあるものの、その予防策に関しては未だブラックボックスの部分が多く存在します、また、小児麻痺者・知的障害者においては、対象者の複雑性のため、十分な情報さえも存在しておらず、十分な健康維持増進活動の施策がとられておりません。そこで、当研究者は、喫緊に解決策が必要にも関わらず、未だ明らかになっていない整形外科疾患罹患者・小児麻痺者・知的障害者に着眼点を置き、健康づくりに関わる諸問題を明らかにすることを考えております。

【参考】

- プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、愛知医療学院理学療法学専攻卒業、大阪電気通信大学大学院医療福祉工学研究科修士課程修了（工学修士）、2010年から星城大学リハビリテーション学部 助教
- 担当科目：日常生活活動学実習、運動学実習、神経筋理学療法学実習、情報処理演習Ⅰ・Ⅱ、整形外科学等
- 社会的活動：愛知県理学療法士協会学術大会部員、精密工学会生体機構制御・応用技術専門委員会運営委員
- 主な著書・論文など
『二関節筋』2008年、医学書院、共著

I 専門分野

リハビリテーション学、健康科学、応用運動生理学

II 研究テーマ

1. 高齢者を対象とする転倒予防のための運動療法の開発 (日本学術振興会科学研究費補助研究、若手 (B) 課題番号: 21700555)
2. ヒト直立姿勢と平衡に対する運動制御機構の解明 (個人研究)

III 研究紹介

1. 超高齢社会である日本国において、高齢者 (ここでは 65 歳以上の方を示します) の転倒予防は重要な課題です。現在、研究代表者は、高齢者の転倒予防に効果的に作用する運動内容や処方について研究をすすめています。転倒を予防するための効果的な運動内容は、筋力増強や体力の維持など多岐に渡りますが、そのどれもが継続するために対象者の相当な努力を必要とします。私の研究テーマは、対象者の方の大きな努力を必要としない、手軽かつ簡便な運動処方の内容を開発することにあります。特に、現在は高齢者の転倒予防に必要な運動機能として見過ごされがち (ほとんどは筋力ばかりに着目される) な、足の敏捷性 (スピード) に焦点を当てています。老化に伴ってなぜ足を素早く動かすことが苦手になるのか、足の敏捷性と転倒を未然に防ぐこととはどのような関連があるか、足の敏捷性を高めるために効果的な運動処方内容とは何か、の 3 点について調査を行っています。

私の研究や活動に関心をお持ちいただき、協働の事業をお考えの場合は、お気軽にお問い合わせください。

2. ヒトは直立姿勢、すなわち二足歩行を行います。ヒトは、二足歩行を行うために、他の四足歩行動物にはみられない、特異的で非常に高次の姿勢制御 (バランスを保つ) を行っています。この姿勢制御機構について、まだまだ不明な点が多くあります。私は、このヒトが二足で立つ、うまくバランスを制御する機構を解明することで、リハビリテーションで求められるヒトの基本的な移動動作である歩行を効率よく回復させる運動内容を考案することにつなげていきたいと考えています。

【参考】

■プロフィール：理学療法士、高知医療学院卒業 (高知県)、名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科博士前期課程修了 (生体情報修士)。高知医療学院卒後研修センター、愛宕病院 (高知県) を経て、2005 年から星城大学リハビリテーション学部助手、2007 年同助教。

■担当科目：講義補助 (技術演習、評価学、医療統計学、生理学、など)

■社会的活動：日本理学療法士協会全国学会査読員、愛知県理学療法士協会知多ブロック学術局員

■主な著書・論文など

- ・『経営学概論』1999 年、中央経済社、共著
- ・『転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル』2008 年、大伸社、共著
- ・『理学療法 MOOK16、脳科学と理学療法』2009 年、三輪書店、共著
- ・『機能障害科学入門』2010 年、神陵文庫、共著

その他、論文 16 編、総説論文 2 編

I 専門分野

健康支援学

II 研究テーマ

1. 運動と免疫に関する研究
2. 尿失禁の現状に関する研究

III 研究紹介

1. 頸髄損傷者のスポーツ参加は、生活習慣病の予防、持久力維持の目的で積極的に推奨されています。しかし、運動は免疫機能に影響を及ぼし、運動強度、継続時間により、その反応に違いがあることが報告されています。私たちは、頸髄損傷者に安全に運動を推奨するために、車いすマラソン競技と免疫機能の関係を明らかにしたいと考えています。
2. 近年、高齢者や障害者の尿失禁が問題視され、その対策が検討されつつあります。しかし、高齢者や障害者の尿失禁には、移動能力や認知機能の要因も関係することから、非常に複雑で明確な対応策が示されていないのが現状です。現在、尿失禁の現状を把握するため、通所介護サービスの利用者を対象にアンケート調査を実施しております。今後は、尿失禁に対する運動療法や各種治療を実施し、その効果を検証したいと考えています。

【参考】

- プロフィール：大阪府堺市生まれ、関西医療技術専門学校卒業、星城大学大学院（保健学修士）、医療法人嘉誠会リハビリテーションセンター勤務、2002年から星城大学リハビリテーション学部助手、2007年から星城大学リハビリテーション学部助教
- 担当科目：理学療法評価診断学Ⅱ、理学療法評価診断学演習
- 社会的活動：日本障害者スポーツ学会事務局、シニアフィットネスリハビリテーション研究会事務局
- 主な著書・論文など
 - ・「転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル」2008年、株式会社大伸社、共著（第1章、3.トレーニングの基礎知識）

I 専門分野

老年期作業療法学、地域作業療法学

II 研究テーマ

1. 愛知県武豊町一般高齢者施策「憩いのサロン」事業参加高齢者の認知機能に関する研究

III 研究紹介

1. 愛知県武豊町において認知症予防として実施されている一般高齢者施策「憩いのサロン」事業に参加している地域在住高齢者の認知機能経時的変化を、毎年実施している「お元気チェック」にて評価・分析している。これまでの結果から、憩いのサロン参加は、対人交流が活発化され、認知機能に良い影響を及ぼす可能性が示唆された。今後は、認知症予防になり得る要因、例えば外出する回数が多い、知的活動（本を読む、新聞を読む）の習慣があるなど明らかにすることで健康寿命の延伸に寄与していきたい。

【参考】

- プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、名城大学商学部卒業、星城大学大学院健康支援研究科修士課程修了（保健学修士）、2007年から星城大学リハビリテーション学部作業療法学専攻助教
 - 担当科目：老年期作業療法学、地域作業療法学、地域作業療法学演習、運動学実習、基礎作業学Ⅰ・Ⅱ、身体障害作業療法学実習、作業療法学特論（老年期）、生理学実習等
 - 社会的活動：愛知県作業療法士会編集協力員
 - 主な著書・論文など
 - ・ 「一般高齢者施策参加高齢者の認知機能低下の割合」作業療法ジャーナル（印刷中）2010年
 - ・ 「血管性軽度認知機能障害（MCI）の高齢女性に対する心理面からの介入プロセスを日常生活支援において共有できた事例」認知症事例ジャーナル 2(3)、2009年
- 「認知症の作業療法」 pp152-157、198-204、2009年、医師薬出版株式会社、

I 専門分野

内部障害

II 研究テーマ

1. メタボリック症候群に関する研究
2. 身体活動量と加齢に関する研究

III 研究紹介

メタボリックシンドロームは中高年になって突然発症するものではない。予防には若年期より生活習慣に留意する必要があると考えられるが、メタボリックシンドロームの検診義務は40歳以上のため、若年成人層の実態は余り把握されていない現状がある。また、活動的な日常生活を過ごすことや運動が健康づくりに必要かつ不可欠であることは既に一般にも広く知れ渡っている。しかし、効果的な運動の量や強度、また効果的な身体活動については、まだはっきりと理解されていない。

私は、本校男子生徒を対象に、若年成人層のメタボリックシンドロームに関する実態調査を進めている。学内で一日の大半を過ごし、皆がほぼ似通ったような生活を過ごしているように思われるが、その体型は様々である。学生の身体測定とともに生活実態を詳細に分析することで、将来、メタボリックシンドロームになることを回避する手立てが明確になるものと考えている。

また、研究成果を広く発信することで、地域の皆様の健康づくりに還元できればと考えている。

【参考】

■プロフィール：和歌山県和歌山市生まれ、神戸大学医療技術短期大学部卒業、和歌山県立医科大学大学院医学研究科修士課程修了、2008年から星城大学リハビリテーション学部 助教

■担当科目：内部障害理学療法学、研究法演習、理学療法演習Ⅱ、生理学

■主な著書・論文など

- ・ 離床・低活動による循環調節予防と治療における理学療法士としての取り組み. MB Med Reha, No.72:71-78, 2006
- ・ Longitudinal changes in physical capacity over 20 years in athletes with spinal cord injury. Arch Phys Med Rehabil. 2010 Aug;91(8):1262-6.

I 専門分野

作業療法学、上肢装具学、上肢バイオメカニクス

II 研究テーマ

1. 上肢装具の開発
2. 人体関節角度計測システムの開発

III 研究紹介

1. 変形や拘縮予防、あるいは矯正や機能改善を目的に装具が使用されます。装具を必要とする方々に対し私たちは装具を製作することも多々ありますが、装具が関節や周辺組織に与える影響については詳細には検討されていません。そこで、装具が関節に与える影響について工学的に検討し、最も適した装具を開発していきたいと考えております。装具の製作に関心があり、協働の事業をお考えの場合は、お気軽にお問い合わせください。

2. これまでに電気角度計を使用し、活動を遂行するための手関節、手指関節の角度について研究を行ってきました。しかし、手指関節は小さく、電気角度計も手指関節に応じた大きさである必要がありますが、電気角度計の大きさの限界により中には十分に計測できない関節もあります。また、動作中の関節角度を計測するためには動作を妨げず、なおかつ小型で軽量である必要があります。そこで、あらゆる関節角度を計測できる関節角度計測システムを開発したいと考えております。関節角度計測システムの開発に関心があり、協働の事業をお考えの場合は、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

- プロフィール：平成医療専門学院作業療法学科卒業、岐阜大学医学部附属病院リハビリテーション部を経て、2006年から星城大学リハビリテーション学部勤務
- 担当科目：運動学、臨床運動学、身体障害作業療法学など
- 社会的活動：社団法人 日本作業療法士協会 学会演題査読委員
- 主な著書・論文など
- ・ The Motor Function of Fingers in Limit of Metacarpophalangeal Joints ROM: Compare with DASH. the Congress of the Asian Pacific Federation of Societies for surgery of the Hand (International proceedings), 17-20, 2008.
- ・ 関節リウマチ患者の人工MP関節置換術における動的伸展装具と Alternating static splint の術後成績の比較. 日本義肢装具学会誌, 24(3), 182-184, 2008. 他

I 専門分野

保健医療福祉学、理学療法学

II 研究テーマ

1. 健康増進目的によるシティマラソンへの参加が心身に及ぼす影響について

III 研究紹介

1. 近年、健康増進を目的として市民マラソンへ参加する人々が増えてきています。しかし、マラソン参加が心身に好影響を与えることが一般市民に浸透されつつあるが、安全性かつ快適性を実際に調査した報告はみられません。そのため私達は、事前のトレーニングも含めての市民マラソン参加が心理面においては不安が軽減され活気のある状態を形成し、身体面においては筋骨格器系に対しても負担がなく実施できるスポーツであるかどうかを検証しております。

そのため、老若男女問わず、「運動」という観点から、市民の積極的健康支援に関わって行きたいと考えております。

私の研究や活動に関心をお持ちいただき、協働の事業をお考えの場合は、お気軽にお問い合わせください。

【参考】

- プロフィール：愛知県豊明市生まれ、国際医療福祉大学保健医療学部卒業、浜松医科大学医学部附属病院にて理学療法士として勤務。2009年から星城大学リハビリテーション学部助教
- 担当科目：実習関連
- 社会的活動：日本理学療法士協会会員、東海スポーツ傷害研究会会員、日本股関節学会会員
- 主な著書・論文など
 - ・健常若年者における10kmマラソン完走者の身体特性の調査。第20回愛知県理学療法学会誌
 - ・前十字靭帯再建術後のスポーツ復帰に関係する因子の検討(第2報) 術後6ヵ月でスポーツ復帰基準を満たさなかった群に再指導を実施した結果の検討

大学院

健康支援学研究科

I 専門分野

リハビリテーション科学・福祉工学、運動学、応用健康科学

理学療法 (リハビリテーション)、転倒予防・介護予防、生活介護福祉機器開発

II 研究テーマ

高齢者の転倒予防トレーニング効果、転倒予防、介護予防、トレーニング

III 研究紹介

企業や研究所との共同研究として、①運動機能評価機器共同開発：ハンドヘルドダイナモメーター (徒手筋力測定器)、フルオートマチック歩行動作分析機器、フルオートマチック姿勢動作分析機器、②介護予防パワートレーニング機器および外乱バランストレーニング機器の共同開発研究、③健康支援機器開発 (歩行解析アドバイスシステムツール「歩ビゲーター」) の産学協同研究、④ロボット動作研究チーム客員研究員として介護支援ロボット開発の産学協同研究などを実施している。

【参考】

■プロフィール：大阪府大阪市生まれ、大阪経済大学経営学卒業、株式会社リハステージ代表取締役、

昭和大学医学部リハビリテーション診療科特別研究員医学博士修了 (医学博士)、2002 年から星城大学リハビリテーション学部教授、2006 年同学リハビリテーション学部長、2008 年同大学大学院健康支援学研究科長

■担当科目：医療学入門、理学療法学概論、理学療法技術演習 I、理学療法技術演習 II

■社会的活動：日本理学療法士学会理事、日本理学療法士連盟会長

〈国内〉日本理学療法士学会、日本義肢装具学会、日本リハビリテーション工学協会、日本体力医学会、臨床歩行分析研究会、日本リハビリテーション医学会、シニアフィットネスリハビリテーション研究会 (会長)

〈国際〉国際義肢装具連盟、北米リハビリテーション工学連盟、国際バイオメカニクス学会

■主な著書・論文など

「高齢者の歩行中の関節モーメント」関節モーメントによる歩行分析：(医歯薬出版) 1997.

「高齢者の歩行」理学療法 MOOK 6・運動分析 (三輪書店) 2000.

「Q&A フローチャートによる下肢切断の理学療法(第 3 版)」 (医歯薬出版) 2002.

「理学療法士プロフェッショナルガイド」(文光堂) 2003.

「アドバンス版図解理学療法技術ガイド」 (文光堂) 2005.

「図解理学療法検査測定ガイド」 (文光堂) 2006.

「体表解剖と代償運動」(医歯薬出版) 2008.

「中枢神経系障害理学療法学テキスト」シンプル理学療法学シリーズ編集 (南江堂) 2008.

「転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル」監修 (大伸社) 2008.

I 専門分野

生体情報工学、神経筋生理学、健康・福祉工学

II 研究テーマ

1. 情報通信技術 (ICT) を活用した重症心身障害児の在宅ケア支援システムの開発
2. 重症心身障害児施設入所児(者)の実態調査の分析
3. 筋音図の基礎と応用に関する研究

III 研究紹介

1. 「重症心身障害児」とよばれ、重度の運動障害と知的障害を重複した人たちの在宅ケアを支援するために、テレビ電話やバイタル信号通信機器などを活用して遠隔診療をしたり、生活相談を行う ICT システムの研究開発を行っています。この ICT システムは高齢者や慢性疾患のある方たちの在宅療養にも役立つと考えています。

(情報技術 (IT) を活用した重症心身障害児 (者) の在宅支援 II. IT システムの開発と実証運用. 重症心身障害学会誌 32 (1): 99-105, 2007)

2. 重症心身障害児の約 1 万人の方が全国の公立、法人立の専門施設に入所されています。約 30 年にわたって、施設に入所されている方たちの生活の実態を調査しています。また、その調査資料 (データベース) を詳細に分析していますが、より快適な生活ができるように役立てたいと思っています。

(公法人立重症心身障害児施設入所児(者)の実態調査の分析—病因別発生原因とその経年的変化—. 重症心身障害学会誌 33: 311-326, 2008)

3. 筋は筋線維という細長い細胞の束で構成されています。私たちが体を動かそうとすると、この筋線維が収縮して力を発揮します。この時、筋の体表面に微細な振動が発生します。これを高感度のマイクなどで記録したものが筋音図です。私たちは、筋音図を記録するセンサーや計測機器を開発したり、筋音図を使って筋の収縮するメカニズムを調べたり、筋疾患の診断に役立てるための研究をしています。

(筋音図法の基礎. 臨床脳波 50 (11): 649-656, 2008)

【参考】

■プロフィール：岐阜県多治見市生まれ、岐阜大学工学部卒業、日本電気株式会社、愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所・部長、川崎医療福祉大学・教授、2008 年度から星城大学大学院・教授 (工学博士)

■担当科目：<大学院>生活支援工学特論、生活支援工学演習、健康支援学研究法、健康支援学特別研究、生活行動科学特論、生活行動科学演習、医療福祉支援学特論、発達障害系リハビリテーション学演習、<リハビリテーション学部>ものづくり論基礎、ものづくり論応用、バリアフリー環境論

■社会的活動：日本重症心身障害児福祉協会 (理事)

■主な著書・論文など

下記のインターネット文献検索サイトなどへアクセスいただき、ご覧下さい (キーワード: 三田勝己、あるいは、Mita K)。 <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/> <http://www.jamas.or.jp/>

星城大学 研究シーズ集

2009年11月 初版

2011年1月 改訂第2版

2011年6月 改訂第3版

編集・発行：星城大学 地域センター

連絡先：

〒476-8588 愛知県東海市富貴ノ台 2-172

星城大学 地域センター

Tel : 052-601-6000